

二十年のあゆみ

四日市市老人クラブ連合会

発刊に寄せて

四日市市長

加藤 寛嗣



四日市市老人クラブ連合会が結成二十周年を迎えた。ここに記念誌を発刊されることは誠に意義深いことであり、心からお祝い申し上げます。

貴連合会は発足以来、多くの会員や役員各位による組織の確立に献身的な努力をされ、老人福祉の増進に大きく貢献されてこられたことに対し、深く敬意を表する次第であります。

最近の人口推計によりますと、我が国の老人人口は一千百一万人で、総人口の九・三%を占めていますが、西暦二千年には一五・六%と急ピッチで高齢化が進み、今世紀末には世界一の高齢化社会を迎えると予測されており、老人問題が大きな社会的関心事となっています。

このような人口の高齢化傾向のなかにあって、住民の福祉ニーズは一層多様化、高度化が進んでいます。低経済成長のもとにおける国、地方の財政状況はますます逼迫の度を強めてきており、福祉行政を取り巻く環境も極めて厳しい情勢となっています。このような状況下

こそ、将来を展望した老人福祉施策の基礎づくりに英知を傾けることが必要であり、大きな今日的課題であるといえましょう。

心豊かで安心した老後を送つていただくためにも、国、県と協調しながら年金・医療・就労・教育をはじめ老人福祉センターの整備を推進するほか、ねたきり老人やひとり暮らし老人等の在宅福祉サービス面にも種々の施策を講じ、その充実強化を図つているのであります。今後の老人福祉を考えるとき、これら行政による施策の推進に加えて、ボランティアや近隣の人々の参加、協力による地域福祉活動を開発し、育成していくことが肝要であると存じます。

また、老人の「生きがい」対策といったしましては、老人自身が健康増進を図り、老人同志で面倒を見合う相互扶助の生き方を推進することや働く意欲がおう盛な老人については、シルバー人材センターを活用するなど、自立・自助による自活力を強めていくことこそ、より重要

なことであると存じます。

老人クラブ自らが、老人福祉を促進する担い手として活動することが期待されるところから、さらに組織の主体性を確立することによって、地域社会の確固たる一員として地域の福祉向上に貢献するその役割は、極めて大きいものがあると考えています。

貴連合会が、この二十周年を契機として、各組織がよ

り一層相互に連携し、協力しあい、社会にとって有益な自主活動を開催され、地域福祉の推進に寄与されますことを切望してやみません。

終わりに、貴連合会のますますの御発展を願い、会員各位の御多幸と今後の御精進を祈念して、発刊のことばといたします。



結成二十周年に寄せて

四日市市議会議長

青 峰 男

四日市市老人クラブ連合会結成二十周年を迎えられ、ここに記念誌を発刊されることは誠に意義あることと心からお慶び申し上げます。

老年人口が我国人口の一割を占めるに至った今日、老人福祉問題は国民的課題となつております。老後の生活をいかに健全で豊かなものにするかは皆さん自からが、それぞれの生きがいを高められるとともに、健康維持に努められることが何よりも必要であります。老人クラブの活動は、こうした面で誠に有意義であり、その内容

の充実に期待するところは非常に大きいものがあります。私共、市議会といたましても皆さまの幸せのため、真剣に、そして精一杯の努力を傾げ諸施策を推進する所存であります。二十周年を契機に、さらに新しい時代の要請や精神にも関心を持つていただき、地域交流、社会奉仕活動等を通じ、市民から愛される老人クラブ、また連合会として、より一層の発展を念願いたしましてお祝いのことばといたします。

発刊に寄せて

結成二十周年に寄せて

お祝いの言葉

四老連結成二十周年を迎えて

老人福祉のこれから課題

デンマークの老人ホーム見聞記

ゲートボールとのかかわり

写真集

○老人福祉大会

○福祉バス

○ゲートボール大会

○スポーツ大会

隨想

○老人クラブ拝見 (26編)

富田地区老人クラブの生い立ちとその経過に就いて

物故者追悼慰靈祭について

わが老人会とその運営

クラブ活動の反省

私達のクラブ活動

老人クラブ会員の歩み

私達の老人クラブ

塩浜地区老人クラブ連合会発足について

四老連創立二十周年に当たって

常磐老人クラブのあゆみ

創立二十周年を祝して

二十四年を顧りみて

八王子町室山寿老会の歩み

内部長寿会発足から今日まで

生きがい農園

四日市老人クラブ連合会設立二十周年を迎える

事業の一端について

四日市市長

市議会議長

市社協会長

市老連会長

志積政峯

加藤 寛嗣

市老連会長

安藤 正

市福部長

四老連顧問

鈴木啓義

一吉

市老連顧問

岩山正

市ゲートボール協会理事長

吉田昇

三

市老連顧問

北納屋喜多留会長

北納屋喜多留会長

東橋北喜樂久会

第三春風会長

市老連顧問

若生会(西阿倉川2)

野田若生会会长

塩浜地区老連会長

常磐西部老人クラブ会長

市老連顧問

若生会(西阿倉川2)

野田若生会会长

塩浜地区老連会長

常磐東部老人クラブ会長

八郷たより	下野老人クラブの歩み	朝明町老人会のあゆみ	水沢西町白寿会の歩み	川尻町寿会	下野老人会長
クラブ活動の一端	墓地清掃	吾がときわ会は十二歳	水沢西町白寿会	日永ついたち会	下野第四老人クラブ
長生きの秘訣	健康づくりの輪を広げよう	健康で長寿を	桜地区たのし会	県地区長寿会長	下野老人会
○ゲートボール	（4編）	私と西式健康法	下野東町野田町白寿会長	水沢東町野田町白寿会長	下野地区第五老人クラブ
ゲートボールの奨め	（6編）	長生きの秘訣	川尻町寿会	日永ついたち会	下野老人会
ゲートボール讃歌	（8編）	健康づくりの輪を広げよう	中央地区浜町明治会	桜地区たのし会	水沢東町野田町白寿会長
老人クラブとゲートボール		（4編）	御館長寿会	県地区長寿会長	水沢東町野田町白寿会長
生きがいをゲートボールに託す		（6編）	下海老町大池	日永ついたち会	下野老人会
私とゲートボール		（8編）	塩浜ゑびす会	桜地区たのし会	水沢東町野田町白寿会長
ゲートボールの思い出			内部峰寿会第二会長	日永ついたち会	水沢東町野田町白寿会長
○想い出・旅の感想			西橋北ゲートボール部総監督	桜地区たのし会連合会	下野老人会
慶應会の旗（思い出記）					八郷地区老人会会长
現在の環境を思う					下野老人クラブ会長
神宮初詣と朝熊の旅					下野老人クラブ会長
四老連結成当時の思い出					下野老人クラブ会長
物故会員追弔法会の思い出					下野老人クラブ会長
思い出の記					八郷地区老人会会长
若き日の思い出					下野老人クラブ会長
想い出の二三					下野老人クラブ会長
○主張	（27編）				
老後の生き方について					
「もうひとりの私」への感動					
二回の高令者教室に参加して					
叙勲の榮に浴して					
中納屋町老人クラブ入道会会長	乾家田後寺	伊石一須齋丹伊安	村仁村伊うさみ竹原	阿伊後中	萩豊野水野樋白
三栄町福寿会	田中藤本	藤川海藤木羽藤藤	木保井藤島	部藤藤島	村田呂谷呂井
中央地区北浜一区天寿会	達保正信	健半喜成之進	真邦新之助	鉄源弥一郎	泰市太郎金太郎
	正次	之丞	丹誠草一	寄一郎	増一雄
	夫治郎	七春	一夫	一一	助一郎
	一三	正之介			

73 71 70 69 68	66 64 63 62 61 60 59 59	57 55 54 53 52 51	49 48 47 46	44 43 42 41 40 40 39
----------------	-------------------------	-------------------	-------------	----------------------

俳句に余生を	浜田第一福寿会
老後の楽しみ	南浜田福寿会
生き甲斐ある生き方の勉強を	常磐東部老人クラブ
前田新町老年の唄	日永ついたち会第八クラブ
随想	高花平高砂会
自らの努力で築こう	笛川老人クラブ会長
羽津地区的三大遺跡	羽津老人クラブ
福祉の心を	志氏ヶ野句会
俳句教室に就いて	富田地区高三区白寿会長
福祉の心を	神前仙寿会
反対語句の考察	智積町たのし会
高齢者の歳末（桑原幹根先生の文）	西坂部長寿会
老人パワー	三重平長寿会
病床にて想う	下海老町
近頃の私	県老人クラブ
風呂敷に学ぶ	八郷福寿会
老人天国に感謝を	八郷寿会
老人が散歩して	大矢知第二緑寿会
陽の当る場所へ出よう	大矢知第六緑寿会
老人たわごと	水沢白寿会連合会長
老人会への反省	保々老人クラブ大樹会会長
私の過去を振りかえり	伊藤 駿
長寿者番付表を試みて	田中 美代子
老人芸文真集	玉井 勝
○開幕・将棋大会	岡田 久
○奉仕活動	越後 茂
○作品展示会	林原 仁
○老人福祉	藤本 仁
○年間行事他	守屋 駿

四日市市の老齢人口の推移・老人クラブ数・年次別推移・高齢者の健康診査の実施状況	昭和五十七年度	四日市市老人クラブ連合会役員	四老連結成二十周年記念表彰者・表彰団体
クラブの横顔	老人福祉年表	編集後記	

館 鎌 加 児 松 水 小 須 伊 伊 小 小 山 平 藤 矢 捜 松 生 伊 白 伊	作 俊	千 代	す ず み	秀 一	左 二	万 五	雅 太	勝 三	富 三	清 次	久
田 藤 玉 岡 越 林 原 藤 藤 山 林 本 野 井 守 木 岡 川 藤 峰 藤	助 一	勝 枝	繁 仁	平 二	良 二	郎	太 郎	一 郎	川 郎	子	駿
作 俊 千 代	す ず み	秀 一	左 二	万 五	雅 太	勝 三	富 三	清 次	久	美 代	子
助 一 勝 枝	繁 仁	平 二	良 二	郎	太 郎	一 郎	川 郎	子	駿	ヤ ス	コ

お祝の言葉

四日市市社会福祉協議会会长

志積政一



老人クラブ結成二十周年誠におめでとうございます。この間、多くの方々のお骨折により、老人の福祉が幅広く守られ、老後の心配が軽減されてきましたことを皆様と共に心から喜び、クラブの発展に永年ご尽力いたゞいた役員の方々に敬意を表したいと存じます。

戦後も三十七年を数え、老人をとりまく社会情勢は大きく変化し、加えて、老齢人口が益々激増の時代に入ろうとするとき、老人クラブが過ぎし二十年の歩みを振り返りながら、今後の方針を練ることは大変重要なことだと考えます。

私共の平均寿命は大きく伸び、老人も大切な社会の一員であります。高齢者も先ず自立に心掛け、出来得る限り積極的に社会に参加して、若人との交流に努めてほし

いと思います。生活の知恵と経験を次の世代に伝えたり、また、昔の健全な遊びを子供に教えることなどは、立派な老人の役割ではないでしょうか。社会奉仕も子供たちと一緒に一緒にやつていただきますならば、その子等にと組んで一緒にやつていただきますならば、その子等にとつて生きた手本となることでしょう。

皆様いつまでもお達者で、社会の先覚者として私共をお導きくださいますようお願いいたします。

社会福祉協議会は、寝たきりの人を抱えた家族や、ひとり暮しの方たちのことも更に力を入れてまいります。皆様のお力添えを重ねてお願いしましてご挨拶といたします。

四老連結成二十周年を迎えて

—福祉の心を育てて相互扶助の地域活動に努めよう—

四日市市老人クラブ連合会会长

安藤正一



このたび四老連結成二十周年を迎えることができたことを、まず会員の皆様方と共におります。高齢者も先ず自立に心掛け、出来得る限り積極的に社会に参加して、若人との交流に努めてほし

四日市市において老人クラブの連合体が組織されたのは、昭和三十八年でございます。当時僅か二十二クラブで発足いたしましたが、今日ではクラブ数一九七、会員一万六千百余をかぞえ県下有数の連合会に成長することができました。これ偏に初代会長山口政夫氏をはじめ歴代の役員の方々や会員の皆様のたゆまぬ努力と市当局の適切な指導と援助の賜物であると深く感謝申し上げる次第でございます。

老人クラブは老後の生活を健全で豊かなものにするため同一小地域に住む老人の会員制の組織であります。そして私達は、お互に「生きがい」を求めて連合会の下に結集し「自分たちの手で道を切り開いてゆく」ということを理念として今日まで努力してまいりました。ただ、この二十年間、平々凡々と組織が運営されて来たわけではありません。時によつては、組織の問題について、場合によつては事業の問題について大きな困難に直面したこと多くありました。しかしながら、その都度市の助言や援助を頂きながら役員全部の創意工夫と情熱と知恵をかたむけて解決に当つてまいりました。その結果、市行政と連けいして老人福祉大会、スポーツ大会、囲碁将棋大会、趣味の作品展示会、奉仕活動教養講座、ゲート

ボール大会の六体行事を確立し、「福祉バス」しあわせ号による老人福祉センター送迎も活発に行なわれております。

このような発展の陰にはそれ相応の年月と苦労を重ねての達成を得たものであります。

ここまで発展した大世帯の四老連は今後何をすべきかを考えた場合、老後保障や、医療の問題は別にして、先づ健康で敬愛される老人、幸福である仲間づくりだと断言します。老人福祉を推進するのは老人自身であり、老人自身がその福祉を高めようとする意慾と努力の結果が、クラブ活動となつてくるのである。そしてあくまでもクラブの主体性を失なわず地域社会から孤立することなく、常に地域の実情と会員に適応した活動を展開するよう工夫することが肝要であります。仲間づくりの中で物事を考え、創造し、人のため、社会のために役立つ老人になろうと学習したり社会奉仕活動に力を入れるなど福祉の心を育てて相互扶助の地域活動にも努めることが、まさに四老連の責務であろうと思います。

今後もいろいろな困難に遭遇すると思いますが、全会員が協力し合い、自らの手で道を開き、一步一歩着実に前進して行くことを誓い合いたいと思います。

最後に、この二十年間に物故した会員の方々のご冥福を祈ると共に、その方々の願いを果たして行くことも私達に課せられた使命でなかろうかと心を新たにする次第です。

どうか皆さん、ご老体を大切に、家内円満に楽しい毎日を送つて頂きますよう心からお祈り申し上げます。

老人福祉のこれから課題

四日市市福祉部長

岩山義弘



人は誰も長生きをしたいと思うのです。

戦後の混乱期からわが国が立ち直って豊かとなり、特に医療技術の

第一線の仕事から身をひくまで、汗水流して頑張つて働き、社会の発展に尽してきた老人が、老後の生活を年金により安定し、医療にかかる出費を除いて、健康でこそやかな余生を送れる条件づくりは、国の社会保障としてこれからも充実さるべきだと思います。また、家族と生活できずに孤独な日々を送っているひとり暮し老人や、心身機能の低下によるねたきり老人に対する老人ホームへの入所や在宅福祉サービスのきめ細かな配慮を一層進めることは地方行政にとって、先ず大切な責務です。

象を、大きな社会的、財政的な危機感と並び論じられているのも残念乍ら事実であります。

それは、高齢化が進んで、人口の老齢化率が高くなると、社会保障としての年金や医療費の増大、社会福祉のための生活保護や老人ホームの入所の負担などの社会的な扶養負担の増加は避けられません。その上に経済の低成長や出生率の低下等の要因は、若い人たちへの堪えられぬ大きな負担となる心配がされている訳です。しかし、これを乗り切り、高齢化社会を健康で生きがいのある豊かな社会としていくのが、これから国民的な課題であり、同時に社会の一員として老人自らの課題でもあると思います。

发展や食糧事情の改善で、平均寿命が七五才を越えて世界の最長寿国に仲間入りしました。長寿を全うできる時代となつたことは、誰もが喜ぶべきことです。しかし、一方が急速な高齢化社会の到来により現れるであろう事

それと共にこれから老人問題で大切なことは、長い老後をどの様に有意義に生きるかにあると思います。老後を長く生きるだけでは眞の人生とはいえません。健康で生きがいを感じなければ本当に長寿を全うしたことにはなりません。

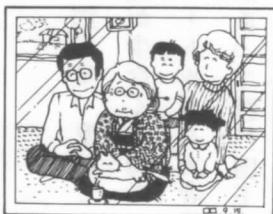
老人の生きがいについてのアンケート調査によりますと、最も多いのは一家団らんの中で子どもや孫の成長を見守ること、次は健康で働くこと、第三が趣味・娯楽に生きること、第四に社会活動へ参加することをあげています。そして生きがいないと答えている方も残念ながら相当あります。生きがいは人それぞれの価値感につながるもので、外から与えられるものではなく、自らの力で積極的にきり開いて頂かなくてはなりませんが、アンケートから解るように、それは家庭という単位社会も含め、社会との深いかかわりの中で創り出されているといえます。

高齢化と共に、近所に長寿を祝うお年寄りが多くなる。仲間が増える。そうした中でも、社会はどんどん変化し、古い生活感覚ではとり残され勝ちになるのも事実です。そこで市としては、健康でゆたかな福祉社会の実現をめざし、生活上困難にある在宅福祉サービスの充実と共に

生きがいを高めるための条件作りを重視し、生きがい就労の場としてのシルバー人材センターの協力、ゲートボールの振興、老人福祉センターの四館の整備、そして老人クラブ活動の助成等にとめてきました。それぞれの施策が相関しあい、老人の健康増進や孤独の解消、そして社会人としての生き方を方向づける生きがい施策として、それは同時に福祉の予防にもつながるものでもあります。

特に老人クラブについては、老人のしあわせをつくりあげる学習と協力の場であり、現在社会を理解し、社会参加をおし進める組織として、求められる役割りは、ますます重要になることと思っている。

四老連の結成以来二十周年を迎える、その発展への努力に敬意を表すると共に、今後地域社会作りの中核としての一層の充実を期待いたします。



デンマークの老人ホーム見聞記

四日市市老人クラブ連合会顧問

鈴木 啓吉



一九六五年（昭和四十年）と云えば、日本も社会福祉事業がやや遅ればせながら進みかけていた頃であった。

当時世界では北欧三国が老人対策で一步進んでいたので、初秋の頃、デンマークへ廻って見た。人口は少ない

がバルト海と北海と小さな半島と、不毛のグリーンランドを含む五百を数える島々で四百五十万の人々が農業、牧畜業とバターベーコン等の乳加工場が多く、昔しは海賊の多い商艦隊で有名な未開発国であったが、今は住民が定着し、現在は比較的富裕で組合による社会組織が発展して健康管理も行き届き結核療養所等への入居者が無いと云う状況であり、福祉は搖籃から墓場まで母子手当、健康保険、老齢保険など利用できるので国民は殆んど老後の心配がない。人種はデンマーク人が大部分で一部ドイツ

人である。

産業は大規模な協同組合による加工業、又はビールの製造等で所得が平均し、貧富の差が少なく首府のコペンハーゲンは静かで環境がよく、ノートルダム大寺院や童話によくあるローガンボルグ城があつて歴代国王の遺品が陳列されている。交通は当時、自転車が非常に多く治安もよく落ち着いた國柄であつた。老人ホームはやゝ離れた静かな所にあり、面積は大きく建物も多い、収容者は当時、千八百名で個室に入っている者が多い。日本では未だ暑いのにデンマークでは北極に近く日照が少く寒い、樹木は多く、落葉し老人ホーム内の人々は厚着して屋外に出て日曜を受けている。

日当りが少ないと疮瘍病に罹る場合が多いから毎日三時間程度は屋外にいる。費用は、当時一万七千円程度支給されこの内、三千八百円を本人の小遣い、残りは食費等にホームへ納入する。健康は充分管理され五十人に一人の割合で医師がつき週一度は映画とかその他の娯楽もあり個室は郷愁を起さないように本人の筆筒、机等が運び込まれてある。男子六十七歳、女子六十二歳になるとホームに入る事が出来る。

食堂、娯楽室などは良く出来ている。コペンハーゲン

の喫茶店など表の日照のある所が一等で、椅子のよい屋内が二等であり同じ飲物でも価が違う。しかし犯罪の少ない福祉の完備されたこの国のホームに驚くべき事があった。それはこのホームにも自殺者が大変に多いことであつた。理由を尋ねると、すべてが完備しているので老人が、ホームに入ると近親者は心配がなくなりあまり寄りつかない、老人の毎日する事は日照を傍受する事で退屈そのものであり食事は朝はコーヒーとパン、マヨレー ドバターで日本円にして二百円程度、昼食はデンマーク式サンドウェッチで種類も量も多いし、このホームで一六歳まで生きた人もいたのに自殺者の多い事は無為化している事が原因であろう。日本のように戦後小さい四つの島に一億一千万の人がいて毎日摩擦のはげしい生活が脳に対する刺戟が強く、かえって長寿を保つのではないかと思われるが、しかし心身の衰へて行く老人に対しても近親のいたわりが何より大切である事をつくづく感じたのであります。



ゲートボールとのかかわり

四日市市体育指導委員理事長
四日市ゲートボール協会理事長

石田 昇三



私がゲートボールと

いう軽スポーツを通じて老人の方々とおつき合いかはじまつたのは、

スポーツ課から社会課

老人係へ転属になった吉川係長から「高齢者の健康保持のため、ゲートボールの普及を課として取り上げたいのと、体育指導委員の手が借りたい」と相談を受けたことにはじまる。

たまたま当時から市体指委の理事長をしていたので、早速体指委の理事会にかけ、「ゆりかごから墓場までのキャッチフレーズではないが、あらゆる階層の市民の体力づくりに貢献するのが我々体指委の使命」とばかり、ゲートボールの普及に一肌脱ぐことが決議された。

ゲートボールの実技習得と審判技術の研修を受け、さらに審判認定試験を受けて、各地区老人会を対象にゲー

トボールの普及に乗り出した。地区老人会の熱意ある対応もあってゲートボールは一步ずつ着実に普及浸透をして行つた。

やがて愛好者の数が増え、四日市ゲートボール協会が設立されることになった。この際、四日市市体育指導委員連絡協議会が実質的運営を任されることになり、体育指導委員がそのままあて職で協会の役員を兼ねることになつた。

体育指導委員の委嘱を受けている人達の主力は、働き盛の年代層で、一かけらの骨おしみもなく、全精力を傾注してゲートボールと取り組み、高齢者の方々と接触した。

このような背景が老連役員の方々の信頼を増し、普及発展にますます拍車をかける好結果を招くことにつながつた。

『石の上にも三年』のたとえもあるが、練習を積むに従つて技量が向上して行つた。これは昭和五十六年五月に三滝公園で開催された中部日本ゲートボール選手権大会を契機に実技、審判技術とも目覚しいまでに向上し、愛好者の輪もさらに広まつた。

それとともに「ゲートボールのお陰で丈夫になつて喜んでいる」とか「医者に行かなくてもよくなつた」という健康面の自信と、「家にいて息子の嫁のぐちばかり言

わなくともよくなつた」、「新しい友達ができる嬉しい」「生きがいができた」など新しいコミュニティ面のメリットまで、予期以上の好ましい反応が見られるようになつた。

最近四日市と同じようにゲートボールの普及に取り組んでいる各地の自治体で「国保の持ち出しが減つたがこれはどうやらゲートボールにかかわりがあるらしい」という声もちらほら聞かれる。これが本当ならこんな嬉しいことはない。

四日市ゲートボール協会も設立されてからすでに四年が経験した。その間年々自主運営の比率を高めて来ているが、今後はさらに全面独立して、独り歩きができるようにして行く必要がある。

現在ゲートボールを愛好している老人の数は三千人弱、市全体の老人人口の十数%に当つてはいる。今後は少くともこれを三十%台まで引き揚げる必要がある。それでは普及とは云えないだろう。これが今の四日市ゲートボール協会にさせられた当面の使命である。

今後もゲートボールは高齢者を中心とした軽スポーツとして老人の方々と深くかかわつて行くだろう。四日市ゲートボール協会と市の老連とも車の両輪のような関係が続く。

両者の今後のいやさかを祈願したいものである。

の喫茶店など表の日照のある所が一等で、椅子のよい屋内が二等であり同じ飲物でも価が違う。しかし犯罪の少ない福祉の完備されたこの国のホームに驚くべき事があった。それはこのホームにも自殺者が大変に多いことであった。理由を尋ねると、すべてが完備しているので老人が、ホームに入ると近親者は心配がなくなりあまり寄りつかない、老人の毎日する事は日照を傍受する事で退屈そのものであり食事は朝はコーヒーとパン、マヨレー ドバターで日本円にして二百円程度、昼食はデンマーク式サンドウエッチで種類も量も多いし、このホームで一六歳まで生きた人もいたのに自殺者の多い事は無為化している事が原因であろう。日本のように戦後小さい四つの島に一億一千万の人がいて毎日摩擦のはげしい生活が脳に対する刺戟が強く、かえって長寿を保つのではないかと思われるが、しかし心身の衰へて行く老人に対しても近親のいたわりが何より大切である事をつくづく感じたのであります。



ゲートボールとのかかわり

四日市市体育指導委員理事長
四日市ゲートボール協会理事長

石田昇三



私がゲートボールといふ軽スポーツを通じて老人の方々とおつき合いがはじまつたのは、スポーツ課から社会課老人係へ転属になった吉川係長から「高齢者の健康保持のため、ゲートボールの普及を課として取り上げたいのと、体育指導委員の手が借りたい」と相談を受けたことにはじまる。

たまたま当時から市体指委の理事長をしていたので、早速体指委の理事会にかけ、「ゆりかごから墓場までのキャッチフレーズではないが、あらゆる階層の市民の体力づくりに貢献するのが我々体指委の使命」とばかり、ゲートボールの普及に一肌脱ぐことが決議された。

ゲートボールの実技習得と審判技術の研修を受け、さらに審判認定試験を受けて、各地区老人会を対象にゲー

トボールの普及に乗り出した。地区老人会の熱意ある対応もあってゲートボールは一步ずつ着実に普及浸透をして行つた。

やがて愛好者の数が増え、四日市ゲートボール協会が設立されることになった。この際、四日市市体育指導委員連絡協議会が実質的運営を任されることになり、体指委の役員がそのままあて職で協会の役員を兼ねることになつた。

体育指導委員の委嘱を受けている人達の主力は、働き盛の年代層で、一かけらの骨おしみもなく、全精力を傾注してゲートボールと取り組み、高齢者の方々と接触した。

このような背景が老連役員の方々の信頼を増し、普及発展にますます拍車をかける好結果を招くことにつながつた。

『石の上にも三年』のたとえもあるが、練習を積むに従つて技量が向上して行つた。これは昭和五十六年五月に三滝公園で開催された中部日本ゲートボール選手権大会を契機に実技、審判技術とも目覚しいまでに向上し、愛好者の輪もさらに広まつた。

それとともに「ゲートボールのお陰で丈夫になつて喜んでいる」とか「医者に行かなくてもよくなつた」という健康面の自信と、「家にいて息子の嫁のぐちばかり言

わなくともよくなつた」、「新しい友達ができる嬉しい」「生きがいができた」など新しいコミュニティ面のメリットまで、予期以上の好ましい反応が見られるようになつた。

最近四日市と同じようにゲートボールの普及に取り組んでいる各地の自治体で「国保の持ち出しが減つたがこれはどうやらゲートボールにかかわりがあるらしい」という声もちらほら聞かれる。これが本当ならこんな喜ばしいことはない。

四日市ゲートボール協会も設立されてからすでに四年が経験した。その間年々自主運営の比率を高めて来ているが、今後はさらに全面独立して、独り歩きができるようにして行く必要がある。

現在ゲートボールを愛好している老人の数は三千人弱、市全体の老人人口の十数%に当つている。今後は少くともこれを三十%台まで引き揚げる必要がある。それでは普及とは云えないだろう。これが今の四日市ゲートボール協会にさせられた当面の使命である。

今後もゲートボールは高齢者を中心とした軽スポーツとして老人の方々と深くかかわつて行くだろう。四日市ゲートボール協会と市の老連とも車の両輪のような関係が続く。

両者の今後のいやさかを祈願したいものである。

昭和53年度 四日市市老人福祉大会

主催 四日市市 四日市市老人クラブ連合会

協賛 四日市市社会福祉協議会



老人福祉大会

結成以来、毎年9月、市民ホールに1,100名が参加。
「老人の豊かな経験と知識を地域福祉の向上に生かす」と大会宣言を決議し、午後から芸能大会で楽しいひとときを過ごす。

第20回 芸能大会

56年9月、市民ホールで行われた、晴れの舞台で日頃の成果が十分発揮された。





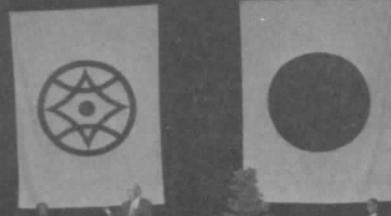
「しあわせ号」発車オーライ…

昭和49年にスタートした市の福祉バス「しあわせ号」は、会員を乗せて今日も中央・西老人福祉センターの送迎に走り回っている。



昭和53年度 四日市市老人福祉大会

主催 四日市市・四日市市老人クラブ連合会
協賛 四日市市社会福祉協議会



老人福祉大会

結成以来、毎年9月、市民ホールに1,100名が参加。
「老人の豊かな経験と知識を地域福祉の向上に生かす」
と大会宣言を決議し、午後から芸能大会で楽しいひとときを過ごす。

第20回 芸能大会

56年9月、市民ホールで行われた、晴れの舞台で日頃の成果が十分発揮された。



第3回 中部日本ゲートボール選手権大会 (市立三滝公園運動広場)



昭和56年5月24日・25日の両日に亘り四日市市で開催。中部7県から選抜72チームが参加、盛会裡に終了した。

生涯スポーツに 最適 !!

第1ゲート通過。百里の道も
第一歩から。



ゲートボールを楽しむ老人ク
ラブ員。
(中央緑地コート)





第5回

老人スポーツ大会

昭和56年10月、市立体育館において
会員 1,100名が参加して盛大に行わ
れた。

プラカードを先頭に堂々の入場行進

けつあつ競争

おしりで風船をわり、足・
腰の運動に役立てた。



つなひき

ブロック対抗戦。明治・大
正青年、大いに頑張る。



老人クラブ 拝見

富田地区老人クラブの

生いたちとその経過に就いて

富田地区老連会長 桜井利七

富田地区は、昔時旧街道宿場で焼蛤の名も高く町の中央は南部藩の統治下であったので、今尚北部に代官町がある。又南方茂福地区は、浅倉下野の守盈盛候の城下で、其昔越前より来られて統治された城下町であったこと。又昔天武天皇の御代にこの部落を富田と号し給うたと謂う由緒が有る。

老人会については、老人福祉法制定以前、昭和三十五年逸早く矢島正三郎氏の会長就任の下富田白寿会を結成し、更に三十九年に成瀬松五郎氏により富田浜福寿会の結成、更に四十二年には富田白寿会七クラブに分轄、富田高一、二、三、及び富田浜南、中、北、及び茂福の七白寿会に分轄、続いて浜元百年クラブと富田浜北部わかさ会が四十六年に獨立したので更に高一区より一地区が

独立、富田いかるが白寿会と名乗り独立して現在の十一クラブと成り、五十六年度会員九百十五名に達した。尚、会の運営に就ては永年の経験により毎月会のたよりを発行し、其月の行事を一般に伝達し且つ注意している。（本年の一月号で創刊以来一五一号と成った）

其他会長の月曜会を定例に催し理事会の経過報告もある。公民館高齢者教育については市内でも北部が元祖で、初代館長秋学氏・二代加藤氏・三代土井氏・四代（現在）辻氏補佐市川氏の下今尚続行、又月例法話も初代会長以來講師は四日市仏教会より派遣を受け、続行している。

地域清掃（墓地共）奉仕作業は、（年間十二、一、二月を除き）九ヶ月間、月の第一日曜日と定め習慣的に続行している。其他バス停留所はタバコ吸殻等、散乱しているので石油空缶（老人会ゴミ函）を備え、近くの会長の責任で処理している。その他体育向上に就いては永い間続行の遠足を止めてゲートボールの推奨に努めている。その他憩の家の集いは、恒例的に遂行の法話拜聴日を利用したり公民館を利用している。

其他年中行事は各地区共大同小異で、四月の総会、九月の福祉大会は法話後を利用して行い、八十歳到達夫婦者と八十五歳到達単身者に高齢祝品と祝詞を贈り、十一

月には物故者追弔法要を當み、同時に御厨子の中へ法名俗名の登録簿を納めている。其他年度末反省会は各クラブ独自で行い、会の運営その他経理についても理解を授けている。

その他のことは紙面の関係で省略いたしますが、老人クラブとは地域の老人が、自主的に集り互に励まし合い教養の向上・身心の健康保持に努め、老人の孤独感・劣等感・欲求不満等、をなくする為に、互に励まし合い慰め合いそして社会活動にも出来るだけ参加し、一日でも老人気分を若々しくして楽しい余生を送るべく励むのが老人クラブではなかろうかと思ひます。

終りに、四日市老人クラブ連合会の益々の発展と二十周年記念を衷心よりお祝い申し上げ、富田地区の生いたちと現状を記述してこの稿を終ります。

祭壇は白布で覆い、中央に物故者の靈と印したお位牌を祀り、その周囲を白菊の花で飾り付け前段に菓子と果物及び籠盛花を各一対づゝ供え別に献花台を置きました。また連合自治会から生花一対を供えて頂きました。

清礎の中にも莊重な氣分が満ち渡り、誠に追悼慰靈祭に相応しい雰囲気が感じられました。

式典は当地区老人クラブ連合会長の開式の挨拶に統いて全員で一分間の黙祷を行いました。それから宮田センター館長と安藤老連会長のご両氏から、それぞれ現在の隆盛な老人クラブに発展するに至るまでの並々ならぬ先輩諸氏のご努力と功績を称えその面影を偲んで厚く冥福

環として当地区連合会においては、去る四月二十五日午後二時より四日市中部市民センター四階大会議室を齊場にて、当地区老人クラブ物故会員の追悼慰靈祭を執り行いましたのでその情況を報告します。

共同地区老人クラブ連合会会長
行 方 庄 助

四日市老人クラブ連合会結成二十周年の記念行事の一

を祈る丁重な追悼の辞を頂戴しました。

故人の方々もさぞ喜んで下さった事と思われます。

次いで静かに流れる琴の音の中で献花式に移り、先づ宮田館長、安藤老連会長、久保村連合自治会長と各々白菊の花を供えて礼拝され、引続き各自治会長、婦人会長、山本代議士の代理、遺族の方々、クラブ会員と一人一人が靈前に菊花を手向け故人を偲び冥福を祈念して頂きました。最後に地区単位クラブの会長八名が献花を行い、先輩諸氏の冥福を祈りまして午後四時に無事式典を終了致しました。

来会の方々全員に供物のお下りとして引出物を進呈してお帰り頂きました。

始めての企画であり幾分の危惧の念もありましたが、幸に天候にも恵まれ多数の方々のご参加を得まして、厳粛且つ盛大に式典を挙行し得ました事を主催者として有難く思って居ります。

遺族の方々から大いに喜んで頂きましたので、今後もこの企画を続けて行く積りです。

わが老人会とその運営

浜田福寿会

山路仙吉

私は昭和四十四年四月前会長急死の跡、推されて十中福寿会会长に就任しました。当時老人会の会費は年貳百円でした。会費と市からの助成金だけでは運営は十分でないと聞いていましたので、何かよい財源はないかと色々考えましたが、結局納税組合を結成してその奨励金を当てにするのが最もよいと思いました。それで早速市の税務課へ行き、納税組合を作りたいがどうすればよいかと尋ねに行きました。市では納税組合を奨励していましたので丁寧におしえてくれました。

それは、組合は二十軒作れば出来、市県民税を完納すれば税金百万円に付き三万円の奨励金がもらえるとの事でした。それで一人独断で二・三日かゝって二十軒を作りました。中には二・三の人は、あなた達の様な税金を多く出す人とは一緒にしてもらえないと云つて断わる人もありました。一人も反対はありませんでした。やつと二十軒同志が出来ましたので早速税務課へ届けました。

まあよかつたと思つたのも速の間、四・五日したら市の方から、あなたが届けられた中には二つも納税組合が出来てゐるからだめですとの通知があつたのでがつかりしました。それは二つの組合とも約十年も前に結成されたが、その間一回も何もせず会計報告もなかつたので、組合の者も納税組合の事は忘れていたのです。

しかし、私はどうしても納税組合を作りたい一念から、両組合長の宅へ行って老人会の実状を訴へました所、両組合長ともその責任を痛感してか組合を解散してくれました。それでまた第二回目の総会を、寺で開きました色々と規約をきめました。そして完納してもらつた奨励金から三割を老人会へ貰うことを決議しました。納税奨励金は年二回四月と十月に貰いますが、その第一回の奨励金の通知を貰つた時のうれしかつた事、今も忘れません。当時の固定資産税は割合に少なかつたので、納税組合も日帰旅行しか出来ませんでしたが、現在では税金が多くなつたので、毎年一泊旅行が出来て皆様から非常に喜ばれています。老人会の方もその為に運営が楽になり、神社掃除、ゲートボール大会、スポーツ大会、旅行等には出て貰つた方には、いつも弁当代を出しています。

満八十歳の方、金婚式の方には上等の座ぶとんを贈呈

しています。又新年宴会、総会等はいつもヘルスセンタードで盛大にやり、皆様から非常に喜ばれています。皆様もまだ納税組合の出来てない所は是非早速結成して下さい。おすゝめします。

クラブ活動の反省

稲葉町家内寿会長

尾崎定一

当老人クラブは昭和三十八年九月結成され、四十九年二月二十六日役員会にて私が第二代目会長に選任されたが、年中行事としては前会長が進めていた事を引継ぎ実行していた。その内容は一月十五日、初会合開催、これはぜんざい会と云つて会員が楽しくなごやかに終日語り合う会です。

四月には菰野の温泉旅行、七月には物故会員供養の初盆で寺職を人に来て頂いて盛大な供養を當み遺族の方、一般の方にもお菓子を贈り供養の念を認識してもらつてゐる。九月十五日は敬老の日、寿司を食べながら踊りを楽しみ長生きを感謝しつゝお互が仲良く健康を誓い合う集りです。

十一月三日は文化の日、おこわ会で一日を楽しく諭快に過ごすのですが、会員の年齢も高齢化してくるし、新会員の加入も余りなく、現在では一人二人と減って会員は結成当時の3ぶんの2程度となつた。このことは本当に淋しい想いで今では役員と何んで会員数が減るのだろうか。どこに原因があるのか、みんなで真剣に討議している。近い中にはクラブ活動方針を再検討して行く事となろう。

老人の交通事故防止も一段と加えねばならないし、心配每が又一つ増えて来た。頑張らなければと心に誓った。健康増進については幸いゲートボールの普及で毎日晴天になれば休む事なく午後一時から三時過ぎまでみんなと一緒に出掛け快適なクラブ活動を続けています。

私達のクラブ活動

北納屋喜多留会会长

波多野 和 助

喜多留会は、昭和三十九年六月十日北納屋町内有志に依り結成され当時の会員数は八十三名で内訳は北納屋町三十九名、浜町二区二十三名、蔵町二十一名で正規のク

ラブ名として発足し、私が会長に就任したのは昭和四十三年十二月一日であります。

私の願いは、会員一同の和合親睦をもつとうに社会奉仕、レクレイション活動の強化であると心に言いきかせ頑張って来ました。其の当時は会員も若く皆な張り切つており、旅行を計画すると五十名位の希望者がありバス一台貸切つて一泊二日のレクレイションを楽しみ、半面町内清掃奉仕活動にも良く働いてくれました。

それから十四年後の五十三年四月一日、蔵町老人クラブが独立し現在では北納屋町と浜町二区で行動を共にしております。

当クラブの活動の主なものを例記します。第一にゲートボールの普及活動状況ですが、五十三年四月だったと記憶しております。市役所福祉課、四老連本部の指導でゲートボールのルール講習会があり各単位クラブ会長が受講、それ以後、港地区老人会は他地区に先きがけ活動な練習を積み重ね優勝を再三とつておりますが、ゲートボールの目的は会員の和合親睦と健康維持のためで勝負は問題にしておりません。今では会員数も増え、五十六年には港地区ゲートボール協会まで結成され毎日和氣あいあいの中で楽しく練習に励んでおります。

配のお方には当地区北端、海蔵川沿いに位置する昆沙門殿がございますので「当老人クラブの会員は、毎月三日の日が昆沙門様の命日に当たりますので、会員多数が参詣して僧侶が来られるまでお茶を呑みながら、世間話に花を咲かせ僧侶を向え、念佛を先に為すごとく手を合せる。憩の場として花が咲いて居る。

今年は当地区老人クラブ喜楽久会が結成され二十周年を迎えて居ますので「会長初め会員は張りきつて」二十周年を迎えようと色々な催しに専念し張りきつて居ります。これ以外に民謡部を設け、若き年齢の事を思い起きて、毎週木曜日を練習日と定め、市民センター日本間を借りて、唄や踊りに多数の会員が参加して、師匠の手解きに身を固め一生懸命に習いを積み重ねて居る。市の催し地区の新年会や総会の催しの場に於ても民謡部の会員が舞台を盛り上げ、全会員を喜ばせてくれる会員達、毎年行われて居る。

東橋北地区高齢者教室に於ても「橋北地区市民センターニ階大会議室も満員」定員五十名のところ受講者が定員以外に受講希望者が多く、老後を心豊かに生きる問題等にとりくみ考える。会員が多いので、会長初め講師の方々も喜んでおられます。年中行事として物故者の靈に

対して法要を営み、物故者の遺族をお招きし並びに地区役員有力者に参列を願い、各会員が参詣し物故者の靈を供養に務めて居る。

私達の老人クラブ

若生会（西阿倉川2）

北 間 修

今から四百年の昔、天正元年（一五七三）、「阿倉川の合戦」の故事によりこの地の名を知ったのはこの地に住んでの事である。思えば史跡の地である。今年は四日市市老人クラブ連合会結成二十年を迎える。私達も青年期に達したのである。大いに活躍の年である。

明治、大正時代の私達青年期を想い起こして奮起一番の年である。今後足早やに進んで来る高齢化社会に対処し、高齢者は高齢者の矜持をもってそれぞれの分野で力を尽そう。その道行はたとえ中涎であろうとも着実に進んで行こう。私達の老人クラブ会員は、心と体の健全のために私達地区の海蔵神社、飽良河神社境内の清掃整備を初め、その他神社仏閣、墓地の清掃に、殊に私達地区が誇る四日市市地跡の、国指定天然記念物アイナシ自生

地の保存と清掃保持管理に力を協せ努力している。

一方、四日市市老人スポーツ大会には進んで参加し、海蔵地区、老人と子供のゲートボール大会の主催参加、平時の練習には海蔵川河川敷の整地グラウンドを利用し、

それぞれにいそしんでいる。物故者追悼法要を年一回當

み、故人の冥福を祈っている。昨秋は会長発案の全会員賛同協力による海蔵小学校学童へ、『手縫いぞうきん』七二五枚の寄贈を実施し、校長より感銘のお札状を受けたのである。今後この運動の拡がりを希望する会員の声である。

こうして私達の老人クラブは若生会の名の下に、総会に集まり旅を共にして親睦の度を益々深めている。今後は進んで街頭に、公園に、公共施設の清掃や保持に力を協せたいと希望している。幸いに先輩が遺して下さったこの良き地区的恩澤を受けついで全会員による健全運営に力を協せ、心を尽していきたい所念である。

四老連二十年史資料としては貧しいが、想い起せばおよそ二十年の昔昭和三十八年四月一日、東阿倉川真楽寺で会員百名余で、第一回老人クラブが設立せられたのが史実に残る此處阿倉川の地が発祥の土地と聞く。初代会長白木卯一さんの多くのご尽力があつて、その後弛むこ

となく前進発展し、現在四代目会長館佐市さんに統いている。今後愈々活力ある、『私達の老人クラブ』の発展を期し、史実の地、阿倉川の弥栄と共に繁榮する事を念願している。

四方の海 静かに明けし 今朝の春

老いの身や しばし春眠 ほしいまゝ

連峯の 鈴鹿の里や 秋時雨

私達の老人クラブ

野田若生会会長

辻 剛

毎年秋には、海蔵若生会仏故者追悼法要があり、会員一同参詣し、又、春夏秋には町内にある県の『重要文化財』にも、指定されている『悟眞寺』の阿弥陀様にも全員が参詣して、法話を聞き心を安らかにし、毎月一回はお墓の草取り等掃除を行っております。

私共町内の老人会は、日頃から健康増進の為に、ゲートボールを近くの広場で練習にはげんだ結果、海蔵地区若生会主催のゲートボール大会には、見事優勝の栄に輝

きました。

又、町内の子供会の運動会には、老人会も全員が招待されまして子供会と一緒になり、楽しい一日をすごし、小学校に雑布を作り寄贈しました。

そして年に二、三回は、慰安旅行にも皆様喜んで参加して、毎日を楽しくすごしております。

塩浜地区老人クラブ

連合会発足について

塩浜地区老人クラブ連合会会长

清水末男

私は昭和五十二年八月塩浜北部ゑびす会に入会しました。

その当時、前会長小林庄太郎氏が病氣で入院されました為、昭和五十三年六月是非会長にと推選され、浅学非方の身で重責を荷う事になりました。

これと同時に四日市市老人クラブ連合会理事にも推選を受け増々重責となりました。

塩浜ゑびす会は昭和五十三年度当時、南部（九十八名）

北部（百七十八名）合計二百七十六名でしたが、その後会員増加を図るために昭和五十四年三月、ゑびす会を三

つに分割しました。

その結果昭和五十六年度には、南部（九十六名）、北部（百十七名）、中部（百十二名）、合計（三百二十六名）にまで増加しました。

また、この他に塩浜地区は磯津ニコニコ会（百二十名）小浜町老人会（八十四名）の単位クラブがあり、地区としての連合会を結成したいと考え、昭和五十六年四月より会則案を作成し、各単位クラブ会長宛に送付し、それに対する各単位クラブの意見を持ち寄って、数回の会合調整を重ね。同年九月に総会員五百三十名からなる、塩浜地区老人クラブ連合会発足のはじとなりました。

現在は毎月理事会決定事項を複写して、各単位クラブ会長宛に送付しているだけですが、今後は少なくとも、月一回「塩浜老人だより」と云うような会報を発行し、一般会員も知る事が出来るようにして行きたいと、考えております。

四老連創立二十周年に当たつて

第三春風会会長

小井正二

四日市老人クラブが、創立二十周年を迎えることにな

りました。

当羽津地区老人会においては、昭和三十四年頃から、進歩的な老人達が集まって、細々と各種行事を行つていただけます。現在も行つてある法話や慰安旅行などは、その中の一例です。特に、バス旅行は、現在のような車社会でなかつたことから、本当に楽しく、活気に満ちた行事の一つだつたということを、長老が懐かしげに語つてくれました。その中で、面白いエピソードを披露してくれました。

当時は、まだ、ビニール袋が珍しい時代で、サービスエリアの数も今ほど多くはなかつた。旅の途中、小用をもよおしたある老人は、ガイドが配つたビニール袋を使って用をすませ、ビニール袋の有り難さと近代化を喜んだという話です。

一方、現在においては、旅をすれば、完全舗装された高速道路と完備されたサービスエリア等に、長老達は目を細くして喜んでくれます。加えて、福祉施設の充実という点で、四日市においては、県下唯一の人材センターが設立され、老人の仕事の場も一応考へられてきています。仕事をする老人、ゲートボールに興ずる老人、緑地センターに日参する老人、旅行を楽しむ老人、修養のた

めに各地の神社仏閣に詣る老人、これらは、どの地区においても見られる老人の姿であり、多種多様な活動を楽しんでいる平和な姿だと言えます。

しかし、喜んではばかりもいられない状況があります。それは、非行問題であり公害問題でもあります。何よりも、老人の激増傾向の問題であります。先日の新聞によれば、全世界で、近々には、老人人口が十億人を数えなお、増加し続けるということです。果たして、現在のような活動だけで満足していく良いものだろうか。近代化され、福祉の充実する現代社会にあって、何かが欠けているのではないか・・・と不安に思う時があります。もっと素朴で、人間のほのぼのとした心に訴える活動の場を求める必要がありはしないか。

当地区の春風会は、年間二回ではありますが、神社と墓地の清掃・整備を行つています。これは、長老達が引き継ぎ、現在も行つてある行事です。人間誰れしも長づるに従つて、何かのために・・・と考えるようになるものです。

しかし、これから老人の活動は、伝統を受け継ぐだけでなく、多様化する社会の変化に伴つて生じてくる様々な課題の解決にも寄与する新しい活動の場を模索して

いく必要があると思うのです。例えば、老人が孫の手を引いて、老人憩いの集会所で子守りしながら茶をすすり、楽しく語り合うこと、ゲートボールを子供と共に楽しむこと、昔話を子供に語り、聞いてもらう等の環境づくり、場づくりをすることに意を注いでみてはどうだろうか。

老人人口の増加というPRにとまどいしながら、近年、老人クラブに入会したばかりの新まい老人は、希望的ではあるが新しい感覚を探ろうとしています。

常磐老人クラブのあゆみ

常磐西部老人クラブ会長

田 中 明 之

常磐老人クラブは、県下はもとより四日市市でも最も早く結成されました。当時会員三十数名で、六十歳以上の男女で構成され昭和二十九年十二月十六日に結成されました。初代会長に山口政夫氏が選ばれました。

当初のクラブ活動は思い思いのレクリエーションをして楽しみ、若き時代を思いうかべて一日を過したのです。会長は暖い環境づくりと老人の福祉とクラブの発展に尽

力され、昭和三十二年九月十六日、三重県知事より第一回の会旗の表彰をうけました。常磐地区の会員は、毎月十六日結成された日を記念して、公民館で例会を開き四日市仏教会より講師を招いて、法話を聞く事にしています。

地区の婦人会は毎年九月十五日敬老の日に公民館で歌や踊りなどを催していただき楽しい一日を過させてくれます。全員に記念品と老人クラブの名簿等を手土産としていただき、お陰でより親睦を高めるようになりました。会員も大世帯となり、昭和四十四年に東部、北部、西部の三ブロックに分け、各部に会長一名をおき、三名の会長の中一名は理事長を兼任、昭和四十七年四月一日松本町三区老人クラブが結成されまして、現在の会員は五二一名になり今後益々増加する見込であります。クラブ活動は各部ごとに計画案をたて、役員会で検討します。

レクリエーションは春は桜、秋には紅葉、又一泊で温泉旅行、ゲートボールは昭和五十一年六月より初め、現在では毎週月、水、金、土と練習、時には盆栽菊など観賞して手入れの苦労話など、趣味に生きる喜び、楽しく生きがいのある生活を送りたいと努力しております。

創立二十周年を祝して

常磐老人クラブ東部

後藤政一

添えに感謝申し上げますと共に、四日市老人クラブ栄光に感謝申し上げ、なお新しい伝統を加付されて益々充実発展をしていただきますよう祈念してお祝いのことばといたします。

二十四年を顧りみて

東日野町寿老会会長

森下一重

常磐有志老人クラブが昭和二十九年十二月以来老人クラブとして発足致しまして今日、大四日市老人クラブが昭和三十八年に結成されて以来二十周年を迎える事になり、心からお祝い申し上げると共にこの永い間老人クラブを見守り育てるためにお力添えを戴きました関係各位に深甚の謝意を表する次第でございます。

私は一老人クラブの一員でございますが、常日頃より思ひますのは終戦後、産業・教育文化等すべての面でその機構が改革され社会情勢が変り、私ども社会の構造を認識する事によつて、自分自身が一筋の光明を見い出したいとの念願で、一生懸命に会員の皆々様と共に後悔のない人生を大切にまもつてゆきたいと思つて居ります。

地区老人クラブとしてはゲートボールで自分自身の健康を保ちレクリエーションは年五・六回の旅行を楽しみにし、明るい老齢を楽しんで居ります。

今後一層クラブ活動を通じ両町の親睦の輪を広げ、地域発展のために奉仕致したいと念願致して居ります。本会の源流四郷寿老会は西日野町三二四七番地。素封家、後藤善之助翁が昭和三十四年三月二十五日設立せられて

先は四日市老人クラブ役員現職の方々の心温まるお力

本年は満二十四周年を迎えました。老人会とは何か内容

が解らず、福祉法制定前のことにて一般人には理解が出来にくく、クラブ造りには私財を費せられ随分御苦労致されたと承つて居ります。

その後追々と認識も深まり四十五年三月、翁の四郷地区老人会長退任時に至りようやく開花期を迎えて、

二代目後藤儀兵衛氏の中期即ち四十六年十月十六日、福祉

祉の先達、善之助翁の悲報に接し御別れに参列。老連前会長山口翁の悲しみの辞にただ頭を下がるのみでした。

今日なお先覚者の功績をたたえ翁の御冥福を御祈り致しましてこの稿を終らせて頂きます。ちなみに翁は、「公共の福祉増進のため大きく貢献せられました」「勲五等に叙し瑞宝章を授与する」生前の勳功により「従六位に叙する」の榮誉に浴されて居ります。

頭書、三クラブ、会長共述、東日野町寿老会、副会長伊藤宗七、会計井上良一、書記田中安吉、活動、スポーツ、ゲートボール、民踊、四老連スポーツ大会リレー競技に入賞す。西日野町寿老会東、副会長古川甚助、会計後藤四郎、書記古川忠芳、広報スポーツ役員大平文助、上同山下むら、活動、民踊、スポーツ、ボランティア、最寄共栄作業所内身障者の積残し作業手助け奉仕。

西日野町寿老会西、副会長大西四郎、会計古川正春、

書記後藤三雄、広報スポーツ役員田中仙左エ門、活動、民踊、ゲートボール、ボランティア、近隣身障者の手助けに奉仕。以下紙面の都合で省略します。

八王子町寿老会の歩み

長 田 恒 吉

私等の会は昭和三十四年三月二十五日西日野町三二四七番地後藤善之助氏の発起人と成り、四郷全域に各町に一名の補助員を依頼して会員の募集に歩き会員数八十四名に達しましたが、関心なき方が沢山居られまして会員を入会して戴くのに随分苦労と努力を重ね漸く設立発会式を催す事が出来ました。会員数は少なく老人クラブの運営にこぎつけましたが、創立当時を思う時一ヶ年の経費予算が二五、〇〇〇円かかり、会員一人一〇〇円であり、市より補助金三、〇〇〇円で実に微々たるもので、不足分は後藤善之助氏の寄附により運営して参りました。事業については、年に春秋二回の総会を開催し講師を招き、法話、教育講演等を聞き教育の向上に努め、会員相互の親睦を計り、有益指導に励み又婦人会との交流を

重ね、社会の為尽さん事を考え神社仏閣の清掃奉仕を始め独居老人の慰問、又は集団旅行等と共に知識の高揚に励み参りました。

其の後会員も増え昭和四十四年四月には名称を室山町以西小林町までを西寿老会と改名し会長に小林友三郎氏が就任し、西日野以東東日野町を東寿老会とし会長に後藤儀兵衛氏が就任されました。西寿老会は小林会長が会則に依り毎年春秋二回の総会を会催し精神修養健康増進の為講師を招き二時間程度の講座を開き講習を受けました。物故会員の冥福を祈り追弔会を隔年執行したり、神宮参拝並に各地旅行又は有益講話を拝聴し、種々と研修を催して居りました。

昭和五十五年九月西寿老会より小林町が分離し千歳クラブとして発足し、昭和五十六年四月室山町が更に分離し、室山町寿老会と成り会長土井恒吉氏が就任す。昭和五十六年四月一日附で西寿老会の小林友三郎会長も十三年の長い間に渡り会員の指導に当られ今日の様な立派な会に発展育て戴きましたが健康がすぐれぬ為辞任され其の後不肖長田孝が引継ぎ八王子町寿老会と改め現在に至つて居ります。

事業としては四郷連合会長後藤吉太郎氏を議長とし月

一回の会長会議を開き理事会の結果報告其の他各会長のディスカッションを行い実施している。又、健康増進の為ゲートボール練習を八王子町、室山町共に週四回旅行している。尚年二回の神社仏閣の清掃奉仕を行ない、又春秋年二回の総会を催し精神修養講座を会員皆に聞いて戴き教養の向上と身心の健康保持に努力して居ります。運営については会員一人会費年間五〇〇円と市補助金での運営の経費を計つて居ります。

内部長寿会

発足から今日まで

内部長寿会連合会長

鈴木松男

内部地区は、市の南端にあり、南は鈴鹿市、西は小山田、北は日永、東は河原田と東海道に沿い、東に伊勢参宮道が走り、内部川を中心に両側には豊かな農産物の产地、東海道側には石油コンビナート工場関係住宅が六百戸程あり、近鉄内部線が走り各町にお寺も七ヶ寺あり、まことに住み良い土地柄です。

二十年前を回顧しますなら、世間がまだ、老人問題に关心をはらわなかつた時代、昭和三十七年、市側の要請

に依り白い髭の温厚な初代連合会長の山口氏と元気のよい斎木事務局長が内部公民館へ来られ、是非内部地区にも老人会をつくられてはという話がございました。

老人の福祉の向上は、老人自身の自覚からということです当時の自治会、民生委員の御協力、特に地元県会議員、栗本音一氏、市会議員、坂上長十郎氏、農協会長、永田巳側氏、医師、河村櫻氏の方々の絶大な御支援で発会式とその年の昭和三十七年十月に内部小学校講堂で盛大に行われました。その時参加しました六十歳以上の方は二百五十七名でした。

初代会長には、自治会連合会長、東川徳蔵氏になっていただき、副会長兼会計に及ばずながら私、鈴木松男がこの重責を負うことになりました。

初めてのことで何から手はじめてよいやらともかく、会員の幸福への協力、会員同志の語いの場をつくり、親睦を深めていき度いという願いをもつてスタートしました。

他に上四字代表として、副会長、堀武一氏、山の手代表、副会長、小川次郎氏、監査、東山源太郎氏、監査、平井勇吉氏、以上六名があたりました。

又、連絡方法として今では考えられませんが、各町に

支部長を置き、各町の役員迄連絡するのに、自転車に乗つて一日中知らせに廻った事もありました。中には留守の家もあり、又、翌日自転車で出掛っている事は度々でした。

なにしろ、当時は、まだ有線も電話も各家庭に普及していませんでしたので、やむを得ないことです。

先輩役員の皆様の御苦労がしのばれ、感謝致しております。

会の組織も二百五十七名から、会を重ねる度に増え、只今八百十三名になり、四日市地区内で三番目と大きな団体となりました。

内部地区には、長寿会と峰寿会があり、合わせて、内部長寿会連合会と昭和三十八年に改めました。

会の運営は、連合会の総会を三月に一回開催致します。年間の行事報告、来年度の行事計画等を審議し、又、会員の表彰は毎年十名、市の表彰は一名、申請しております。

内部地区でこれまで表彰された方々は、別記に記載致します。

他に会長会議を毎月定例で二回開催し、各行事について審議し決定を行っています。

各部の内容を紹介しますと次の通りです。

企画部 連合会の総会、各地区の総会の企画。

奉仕部 神社、子供遊園地、墓地の清掃月一回実施。

教養部 幹部会員の修養、講話年四回、高齢者教室十回の開催。

文化部 民踊、若草会二十名、笹菊会二十五名、敬老会慰問奉仕。

体育部 連合運動会、歩く会、ゲートボール大会実施、

四日市大会、南部大会。

旅行部 県、市主催の旅行に参加、年二回

その他、地区主催の日帰り旅行参加

時には、高齢化社会への対応として、健康な老人に対しては、その方のもつ能力を活用できる場をつくっています、地域から市へと輪を大きく育てていきたいと考えています。

会員、御遺族、役員も参列して、非常に皆さんから有難い行事と喜んでもらっています。

このように、この地区ならではの行事、そして、各地区との共通の行事を通じて楽しい企画をつくり、老いてますます、敬愛の心で迎えられる日々を過そうと思っています。

内部長寿会

連合会の年次記録

内部連合会副会長

中川清治

○昭和三十七年十月

内部地区老人会発足、会員二百五十七名

○昭和三十九年

この他に内部地区での主な行事として、年一回物故会員の追悼法要がいとなれます。

寺又は町公民館に於いて御名号入り、物故会員の名号生年月日、法名記入の大軸を掲げ、地元の寺の住職を招

住民、老人会の要望により内部郵便局新設、最初の泊記念旅行に汽車で善光寺参す。また長島温泉行バ

ス十台で慰安す。参加者四百八十名。

○昭和四十一年九月十五日、敬老の日制定

第一回物故会員追悼法要を采女町成満寺で行う。参

列者四十五名

県、市の運営費助成当地区、六万七千四百円、内部地区自治会より一萬円の補助を受く。本年会員数、

四百八十五名

○昭和四十三年、県老連から花の明治、老人会の歌が発表される。

明治百年記念に四日市市長より鈴木連合会長表彰さ

れる。

物故会員靈碑樹軸新調記念大法要をする。（小古曾采女、波木、北小松、貝家、東小松、山の手）の七

地区

南部六地区連合運動会に出席

湯の山グリンスパー夏の芸能大会に三百五十名参加

○昭和四十四年、大阪万国博覧会に八十六名が参加す。

○昭和四十五年、小古曾公民館新築される。

三重県善光寺慰靈塔完成

○昭和四十七年、東京大相撲四日市市立体育館に開催、

安藤氏の無料奉仕

○昭和四十八年、小山田青山里老人ホーム落成

○昭和四十九年、はり、マッサージの無料奉仕を受ける。

南部六地区高齢者教室研修会が月一回の割合で開催された。

県主催、つるかめ大学開催、南部地区より二名受講した。

三重国体に両陸下を県四日市庁舎で奉迎、老人会十役員出席す。

老人福祉センターで毎週火曜日、茶道研修会開催、当地区より七名出席す。

○昭和五十一年、三重県知事より優良老人クラブとして表彰され団旗を受く。各会員に記念品を贈った。

内部地区老人会、十五年の歩み、冊子を発行す。

市老連主催の将棋大会、菊花作品展、趣味の作品展に多数の方が入賞する。

○昭和五十四年、五十五年の二ヶ年間、四日市々最高年齢者として、多田みつ（波木町）百歳 県知事、市长よりお祝品を受く。

○昭和五十六年、西老人福祉センター（坂部温泉）落成

内部高齢者教室発足、月一回、会員五十名。小山田特別養護老人ホームと泊山寿乐园を友愛訪問す。

中部日本ゲートボール大会（静岡県）及び全国大会

に内部地区より選手を送る。

四老連主催の囲碁大会に優勝す。

○内部地区連合会年間運営費は次の通りです。

県、市助成（七地区）四十万円

内部連合自治会〃 六万円

憩の家、市助成 七万円

七地区自治会 拾四万円

一般寄付金 八拾三万円

会費（一人当百円） 八万一千三百円

合 計 百五拾八万一千参百円

右の外に地区基本財産 三拾万円

利息で年一回の物故会員追悼法要を行う。

物故会員の現在数は、四百十五名です。

小古曾	一一〇名	采女	六十九名
峰寿会	六十名	貝家	四十五名
波木	四十八名	北小松	三十八名
南小松	四十五名		

以
上

老人会の早期発生地であり誕生地である四日市市です。
なにか老人としての生きがいをと川島きさらぎ会会長村
田半次郎翁の提案に先づ仏心南無阿弥陀仏。これには先
輩諸氏の靈をなぐさめる追弔会を催ししたらと毎年八月
二十日伊藤哲城師を迎え永角山西福寺、川島山歴明寺両
寺交代で開催されて
います。

その法話の中で老
人は土と戦う健康作
りを解かれたお話を
耳にした会員は奮發
し生きがい農園の名
案が会長始め会員で
一致し、よし明治青
年の腕を土と努力で
磨こうではないかと

生きがい農園

川島きさらぎ会副会長

稻垣一郎



葉ボタン栽培が決議され、会長の熱意ある啓蒙の基に会員に高齢者教室の生きがい農園葉ボタン栽培講習に参加を呼びかけたところ俺も私しもと約五十余名の男女メンバーが集り、県農業改良普及所の諸先生（生きがい農園講座）のご指導を受け最早十年も栽培に専念しています。

暑い時であり年々新しい山土をダンプ車に二～三車を購入し栽土作りから始り、苗床、施肥、種蒔、日履作り、灌水、防除、除草、と役員は一日交代で管理に邁進。二

ツ葉が出れば高齢者教室全員にて移植、一ヶ月もすれば又移植本葉になれば仕上移植を行っています。真夏なので管理は並たいていのことではないが、誰一人不平不満のゲチをこぼす者もございません。只会長、役員の指示に服従するのみ今の社会で味うことのできない明治青年の根性が現われています。

「川柳につらい世に明治なりやこそ耐えてきた」。日

本に住んで良かつた福祉國」が歌われている様にこの努力と一致団結、相互扶助、の精神が実り、自慢するではないが毎年みごとな葉ボタンが栽培され、川島きさらぎ会からの歳暮として地区の皆さん、各種団体、お世話に成った機関の方々に鉢植にして贈つて喜こばれた時の会員は、童心に返つた様な大喜び、真夏の栽培管理の苦労

も忘れて、来年はもつと立派な葉ボタンをと日々に研究心を燃やし楽しんでくれるこの意欲こそ生きがい農園であります。会長始役員にとつてどれほど想い出が多い楽しい生きがいだと想い、二十周年を祝し隨筆としました。

四日市老人クラブ連合会

設立二十周年を迎え

川島地区きさらぎ会会長

村田半次郎

本年は四老連設立二十周年を迎へ、意義深き新春を四老連会長安藤正一殿を初め、役員各位並びに一万六千名の会員の皆様が御健勝で御長寿を御慶び申し上げますと共に、今後入会せられる会員の皆様に申し伝え、是非知つて頂きたい事情を述べ、少しでも皆様の参考になれば幸に思つて居ります。

現在の四老連は目覚ましく発展致しつつあります事、ひとえに会長を初め役員事務の御指導と会員の皆様の奮足と努力の賜であり、私常に感謝致して居ります。私が皆様に知つて頂きたい事情とは、老人クラブは政府や県からの天下り指令でない事。老人クラブ誕生地、クラブの産声は何処であげたか、又如何なる心境で思い立つた

かと云う事であります。誠に失礼とは存じますが現在の県老連会長を初め支部長、其の他役員の方々には一人も知つて居られる御方は居ないと私は思つて居ります。なぜならば此の発起人が私であるからであります。

私は当時六十五歳以上の老人は、日本古来無き大困難にあり、口で云い現わす事の出来ない苦しみと悲しみ、今日、明日、毎日兵隊送り次男、三男は覚悟の上、最後の長男も家の表より赤紙持ち、につこり笑つて家に入り今日か明日か待つて居た。来るべきものが来たと差出す

召集令状。後二日間故、今より親類を廻ります。家の準備頼む。自転車で家を出る長男、送り出す妻、幼き孫の顔見る親心。長男門出に申し残した、両親共にからだ大切に、妻子をよろしくたのむ。とのことば。又妻に老年の両親と子供をたのむと云う。妻は御安心下さいお引受け致しました。子供は立派に育てます。御無事でお帰りの日を楽しみ励みますと云う。妻幼き子供に日の丸の小旗持たせ父さん萬歳と、こぼれる涙のみ込み顔でにつくなり、心で泣いて居る妻の心中、朝夕夫の武運長久を祈り夫よりの便り待てど暮せどなく、待ちに待つた便り持つて來てくれた役場の人、受取見れば名誉の戦死の公報、親として妻としてこんな悲しき事、これを見て居る親の

胸の中、この心境は同じ境遇に合つた人でなければわからん。私も長男が戦死遺族の一人であります。

又、爆撃を受け一夜の内に四日市も焼け野原と化し、子を失う親。親を失う子。妻子を失う夫。一夜に何千人の死者地獄の有様。此の危険を免れた老人を、このまま一生を終らす事は我々中年の者として申し訳けない。老後の幸に平和と生きがい、心の安らぎをあたえ短かき一生とは申せ、楽しく暮して頂きたいと心に固く誓い、思い立つたのであります。

其れより協力者の選考は、戦時中より男の中の男と信頼して來た常磐村中川原の山口政夫氏を、昭和二十七年一月三日に尋ね、私の心境を申し、両手をつき頭を下げ協力を御願い致しました。其の時山口氏が私の手を取り親方頭を上げて下さい。私も同感、二人でやりましようと二人で固く手をにぎり、誓い、此の時程うれしかった事はありませんでした。思わず私泣きました。二月に二回目会合致し行事を法話に決め、それより二人で各所の布教師を尋ね、法話も聞き、経費の都合上法礼も聞きしに、いづれも一日の法話故、中食付き貳千円であり何年かかるかわからん行事故、経費のかからん様にと思い、員弁郡藤原村市場の覚性寺福住職伊藤哲城師に心境を話

した処、青年布教師哲城師が此れ程結講な会は初めて聞きました。協力でなく私に奉仕させて下さい。此の会が完成迄何年かかろうとも月一日必ず奉仕致します。法礼一切無用、中食は皆様と同じ食事をたのむとの御返事。私共二人は勇気百倍、四月十五日に山口氏方を会場として、老人集会を開き其の時は老人十六名、五月は参十名、六月四十名、月毎に増え二年間に常磐地区ばかりでなく、日永、浜田、新正、日野の各地より申し込みが有り、其の数百六十名にも達しました。

この事を常磐自治会会长川村庄之助氏に一切を語り公民館を月一日無料で借りる様申し出て、心よく聞き入れて

頂き会長を御願い致せしが、此の会は君達が苦労致せし会故、君達でとのお話しで初代会長に山口政夫氏五十八才にて就任、私六十歳で会長相談役川村氏の望みで会名

を常磐老人クラブと致し、川村氏が名付けの親であり、

常磐公民館で誕生、老人クラブの産声を上げたのであります。其の後二年程たつて県の社会課より、山口氏方へ老人クラブの組織等に付き聞きに来て、其の後県の進めで各所に結成あり、四日市は早く常磐老人クラブを見習い各町結成三十七年中に三十クラブ結成、三十八年に四

老連設立初代会長に老人クラブ生みの親山口政夫氏就任、

県老連も同じ年に設立したが、初代会長より代々の会長は大名氣分の会長の様に思われ残念でなりません。四老連初代会長山口政夫氏、二代目会長安藤正一氏の如く社会の為、会員の幸福の為身命財を捨て社会又老人クラブに奉仕させて頂きますと我心に誓いし会長でなくてはなりません。私は真心で思い立ったのであります。四老連は初代、二代共に我身命財を忘れての御奉仕に感謝の他ありません。会員の皆様一丸となり固く團結致し、会長に御協力、御支援下さる様御願い申し上げて私の二十周年記念の御祝の詞と致します。

事業の一端について

神前仙寿会連合会長

川 村 佐 吉

神前地区仙寿会第三クラブの有志の方々が集まり、法話を聞かせて貰い、老人の未来の希望をたのしむ為に、法友会を開催する相談がまとまり、昭和四十八年六月十九日、曾井町の觀音寺に於て発開式を挙行致しました。約三十名の方が集りました。

会長に当地の自治会長、坂倉万吉氏を選び、副会長に

神前地区仙寿会第三クラブ会長を、副会長兼会計に、川村佐吉氏を選び、世話役幹事に、川村こま、川村ひさ哉の二名を選びました。

協議事項として、

(一) 会員一名月額百円宛出し合う事

二ヶ月に一回位講師に来ていただく。

(二) (三) 来月中頃に桑名市萱町法盛寺住職
福井照真師に来ていただく事に決定致しました。

先生は京都帝大文学部卒業後龍大に入学せられ宗教学を研究卒業せられ、現在に至る。只今文部省の顧問として北海道方面へ講師に時々出張せられます。

第二日目に、先生に来ていただきました。其節に御礼に金一万円致しましたが、こんなに御貰いすると永続き出来ませんから、是非半額にして貰いたいとの、御言葉が有りましたので、金五千円を贈る事に致しました。

第三回は会長との懇談会、第四回九月二十六日に来ていただきました。全員熱心に聞き、皆大よろこびで帰られました。第五回も福井先生に来ていただきました。

十二月十八日の第六回目は、御都合悪く代理に同町内の仏願寺の、小谷一美先生に来て貰いました。第七回目は会長との懇談会をなし後、肉飯を炊き、会食を致しま

した。第八回は福井先生に御願い致しました。第九回目は会長との懇談会及び相互意見発表等、有意義な話し合いがありました。

第十回、第十一回は福井先生に法話を聞き、喜びありました。丁度一ヶ年過ぎました。皆様方の仲には時々変った方を入れて、聞かせて貰うのもよいと、云う方がありましたので其の様に致し三年余り変った方々を加えて御聞かせいただきましたが、昭和五十三年二月から亦福井先生がよいと云う事で引き続き御聞かせ願つて居ります。丁度連続四十回聞かせていただきました。

先生の御熱心と御仏の御心労を御聞かせ賜り、只感謝なしには日暮しが出来ないと云う程になりました。皆様の心も次第に先生の御話に共感せられ毎日を楽しく過ごせる様に見受けられたのしく思つて居ります。

只今では食費徴収には心配なく何時も心に、お掛け下されましていつとはなしに、御寄附に預り、有り難く感謝の外ありません。

合掌

八郷だより

八郷地区老人会会长

白井忠博

八郷は八ツの郷の集りであり、昭和三十六年に老人有志による親睦会が結成され、昭和三十八年に老人会として福寿会が成立し、当時会員一一六名で地区老人会の発展に尽力してきましたがその後急速な地域の発展に伴い第一、第二福寿会が結成され、昭和五十三年には会員四百名になり更に寿会が結成され三単位クラブとなり現在に至る会員も五二十名（現在十二町）と増加し、単位クラブ間の融和提携と会員の心のふれあいを重要視して、会の運営と活動に努力しています。

月例役員会議 年十二回

単位役員会議 年十二回

研修会 随時

会員の研修 健康のための事業

生きがい学級 随時

ブロック講座 随時

単位講話 随時

地区健康相談 一回

ゲートボール大会 毎週二回
ブロック大会 北部一回

中央大会 随時

地区運動会参加

茶道会 每月二回

追弔会法話 三月

会員の趣味向上

趣味の作品発表 十月

会員の娯楽慰安

老人芸能大会参加 年二回

有志慰安見学旅行 随時

民踊 每月二回

社会参加

喜寿、米寿者への御祝

誕生会

ねたきり、独居老人の慰問

以上の事業活動を一段と拡充して老人相互に楽しめる会の育成に更に一層の努力をしたいと考えています。

下野老人クラブの歩み

下野地区老連会長

樋口 金太郎

清水流れる朝明川の北岸に広々と開けた田園、朝明川とその田園を小わきにかかるように連なる丘陵地、この美しい自然をふるさととして下野老人クラブも昭和三十八年来活動してまいりましたが、その歩みを簡単に紹介してみたいと思います。

昭和三十八年、下野老人クラブとして発足、各町毎に選出された役員と初代会長水谷専蔵氏のもと、神社や墓地の清掃など奉仕活動を中心に活動をすゝめてまいりました。

昭和四十三年に谷口専三郎氏が会長に、また四十七年に樋口金太郎がその任につきましたが、この間組織人員も大きくなり、組織整備をいたしました。
すなわち、これまで单一組織であったのを細分化し、山城町を第一クラブ（谷口利三郎会長）、朝明・札場町を第二クラブ（樋口金太郎会長）、大鐘・西大鐘町を第三クラブ（広田徳松会長）、大鐘・西大鐘町を第四クラブ（野呂

忠四郎会長）に、区分したのです。そして昭和五十三年にはあさけが丘老人クラブが第五クラブとして、また八千代台老人クラブが第六クラブとして、下野老人クラブの仲間に加わり、加入会員数は現在では四五十名をかぞえています。昭和五十五年からは四老連の指導もあってゲートボールに取り組み、多くの会員から歓迎され、今では六チームが結成されて日々練習に励んでいます。

クラブ活動の一端

—墓地清掃—

下野第四老人クラブ

野呂 増雄

それは十二月二十八日早朝六時、東の空がほのかに赤味をさしてきた地区の墓地に、草をけずる鋤の音、削つた草や落葉をかき集める熊手の音が入りまじって聞こえてくる。墓石の立ち並ぶ間のあちこちに供花をする人、花に水をやる人等でいそがしそうな朝のひとときである。集めた落葉や枯れた花を焼く、こうした墓地の清掃は、私共地区的老人クラブ員が毎月二十八日を定例日として行っている。

作業は約一時間で終り、全員集合して、クラブの活動

について反省し、次の会の事業の打合せ等もする場となる。老人クラブ二十周年記念事業についても、こうした場でその基本線がきまるのである。

それにつけても三月前迄ゲートボール選手として元気に活躍してくれた藤波君が不治の病に倒れこの墓石の中に永眠していることは誠に痛恨の極みである。

行く年一年の私共の墓地清掃に町の自治会から金一封を贈られ、今朝の作業後全員に密柑を一袋づゝ分けたのは七時半であった。

吾がときわ会は十二歳

下野地区第五老人クラブ

水 谷 一 雄

吾があさけが丘団地の造成開始が昭和三十九年、四十一年より入居が始まり、四十五年になつて自治会長の協力を得て老人会結成の運動に入つたが、寄合世帯にてなかなか入会を得られず、自治会長と発起人の苦労が偲ばれる。

漸く五月に四十名にて結成総会を行ない、当日タオル一本、紅白饅頭、菓子袋を配布して会員の関心を集め喜んでいます。

特にゲートボール部は毎年十二回優勝して表彰状と盾が八個あります。

日曜日と雨天を除き、北西の風が強くとも、雪が散らついていても中央公園に歓声、喚声が響き渡ります。

ばれました。年間会費三〇〇円にて期末には二十三名増え、員して六十三名となりました。年々十名位の新入会員がありますが数名の物故者があり、昭和五十六年度第十二回総会を得て現在に致り、会員一〇三名年間会費一〇〇〇円にて運営しています。

結成当時の老人会の行事としては旅行位にて年六回位の旅行を楽しみにしていました。

社会奉仕活動としては中央公園の公衆便所の清掃を週一回行う程度でした。老人福祉に甘んじていたのでしょうか。

昭和五十二年より歩こう会、踊り会、書道部をつくりその後園芸部（一〇〇坪）、民謡部、五十三年ゲートボール部をクラブ活動として続行しています。

踊り会、民謡部は総会、敬老会、文化祭に出場して好評を得ています。歩こう会は北警察署より黄色い交通安全旗十本の寄贈を受けて、かつて約四糠を一時間にて歩いています。

特にゲートボール部は毎年十二回優勝して表彰状と盾

社会奉仕活動としては団地内各公園の樹木伐採と清掃を行っています。

高齢化社会の進展に吾等老人会は如何にして対応すべきでしょう。

朝明町老人会のあゆみ

下野老人会

野呂菊治郎

朝明町老人会は昭和三十三年頃会員十三名にて始まり、戸数百戸ばかりの町内で五十六名となり、大きな成長ぶりです。何事も話し合いながらやかな町内の相談役として愛されながら次の行事を行っています。

毎月お宮さんと墓場の清掃は、月末の土曜日の午前中と定められ、殆んど全員が出席、清掃に励んでいます。

そしてお菓子かアメ、みかん等いただきながら家庭の話から、旅行、ゲートボールに菊作りとあらゆる世間話に花を咲かせます。この行事も昭和三十五年より始まり今まで続け、昭和四十五年には十年継続で三重県神社庁より感謝状をいたゞき引き実行中です。

尚、昭和五十三年五月には市役所広報課より地域の話

題として、作業の模様を写真にて広報よつかいち紙上に発表して下さいました。

又、毎月第二、第四の土曜日午後は歌の会として新旧の歌を習い大いに若やいで四方山の話を交え、和気あいあいに楽しいひと時を過します。尚、新年会、忘年会も全員出席、御馳走持寄りで盛大に催され、日頃ののどを競う神士淑女の無礼講は何よりの楽しみです。

旅行は県連合会や四日市支部主催は勿論、旅行会よりのお寺まいりや観光旅行も誘い合せて大ぜい参加させていたゞいて居ります。お陰様にて他地区にも良き友が出来色々と情報の交換もさせていたゞき、楽しむ中に生甲斐を見いださせていたゞき、老いを知らぬ幸福な老人の集りであります。昭和五十一年に話し合って作った会の歌を左に（戦友の歌詩）

清き流れの朝明川

川により添う朝明町

先祖の遺風受け嗣ぎて

子孫に渡せし老人会

朝な夕なに守り受く

産土宮城に詣では
月に一度は掃き清め
心淨むる老人会

会を致しました。当初の会員は僅か十名余りでした。内
男子八名に女子二名の割合であつた。市連合会指導の下
に種々の行事に会長以下一同、手をつないで歩んでまい
りました。

先祖の御恩しのびつゝ
墓場の掃除怠らず
心の持よで極楽地獄
ともによろこぶ老人会

先づ南部ブロック単位で年一回の運動会を各町交替に
て責任担当し、実施してゆきました。又芸能踊大会にも
揃いの衣裳を作つて、会長以下張り切つて参加しました。
そして市内にある老人福祉センターなどに友愛訪問を今
日まで続けてまいりました。

余生楽しく意義深く
社会奉仕やリクレーション
たまの旅行も打揃い
心のかよう老人会

物故会員の御供養を町内のお寺さんで毎年続けており
ます。そして二年に一回の割で物故者のみ靈を県連合会
協力のもとにまとめて長野県の善光寺さんへ納めてまい
ります。

水沢西町白寿会の歩み

四日市水沢西町白寿会

豊田市太郎

私達老人は過去に於て多難な人生を歩んできた。今日
二十年の昔を想い出してみたいと考えます。

当四日市老人会が結成されて数年後に当西町地区も入

各種の研修旅行にも役員以下之に参加致しております。

会員一同による趣味の作品展にも仕事の合間をみて之を作成出品して楽しんでおります。小学校の運動会にも全員出て民謡踊りをおどって孫達に喜んでもらっております。老人教室にて老人の健康について有益なお話をしきかせもらっております。

終りにあたり今後益々会の発展育成に手に手を取り合つて進んで行く決心であります。

クラブ活動について

水沢東町、野田町白寿会長

萩村泰平

当白寿会は、昭和三十八年四月一日、水沢東町十六番十九番と野田西区、東区を似つて結成され、初代会長安田勝七氏で会員数一〇二名が、現在では一三一名に増加し会員一致協力し豊かな明るい心を養いながら、お互に助け合い老後少ない余命を仲良く暮らすため一生懸命に頑張っております。

私どものクラブ活動の概要を報告し皆様方のご批判を仰ぎたいと思います。

(一) 社会奉仕活動は、年三回東町、野田町の墓地清掃

に汗を流している。

(二) 保健体育活動は、毎週水、土曜日をゲートボール日と定め、東町公会所広場で有志十五名で楽しく行い、民踊は年十二回、町民運動会年一回に四十名参加、血圧測定年一回を実施し保健の維持に努めている。また老人の生き甲斐、とくに健康保持問題として講演会を年三回開催している。

(三) ねたきり老人、独り暮し老人の見舞と慰問を隨時グループ制で実施している。

(四) 生きがい農園を設置し、野菜、花弁類を栽培し収穫物を独り暮し老人等や、会員に配布し喜んで頂いています。

(五) 会員の慰安行事として、一泊旅行を年四回、日帰旅行として民謡踊りの会で年四回を実施している。役員等の開催は、毎月定例的に実施し、総会は四月、新年懇談会には会員の半数以上が参加され、和気あいあいの中で活発な意見を交わされ終了後は、会食に舌づつみ、唄や踊りで楽しい一日です。マイクも新たに購入したので増え張り切つて居ります。

(六) 会費は年間五百円、クラブ員の七割は明治生れの

方、大正生れとはお手てつないで仲良く活動しています。

(八)弔費については、会長が会葬に出席する場合は二千円、他の会員は志します。また物故会員の追悼合同法要は二カ年に一回、町の寺で法要いたしています。

私達のクラブも結成二十周年を迎える誠にお目出度いことです。今後も今までどうり会員相互が助け合いクラブ活動を更に、さらに活発化するため役員を始め会員の皆さん団結しましょう。



— 健・康・づ・く・り —

健康づくりの輪を広げよう

川尻町寿会

中島寄助

四老連結成二〇周年に際し、ペンをとる機会を与えていただきたので、平素より考えていることをのべて諸賢のご指導を賜わりたいと存じます。戦中戦後の激動期を生き抜いていま平和で経済的繁栄の日本で、健康に恵まれ安定した生活を送り得ることは、まことに有難くこれも全く神仏の加護によるものと喜びながら楽しい感謝の日々を過しています。

この機会に、私が近年実施している健康法と先輩諸士の実施されている健康管理について取り上げてみたいと思います。先ず私は毎朝六時半頃起床、直ちに乾布マサツをして、その後十五分間位準備運動として、徒手体操を自分で組んだものを実施、つづいてその場駆足を三回四百回行なつてからランニングに出発する。毎日二千米

以上きまつたコースを走るこれは七年間近くつづけている。帰えると汗をぬぐいシャツを着替え、しばらく休憩してから朝食にする。又昼間の時々ひまな時間に、アスレチックカード票による運動を一日に十点以上になるよう行ない毎日その点数を日記録して一ヶ月毎に集計し、自分の健康度の参考にしております。

また、食事の面では家内ともよく相談して栄養のバランスに注意し、とくに塩分と糖分の使用は少なくし、砂糖は黒サトウかキザラを使用します。一日に一度は酢のもの、牛乳、卵、大豆、納豆などを多くとるよう心がけ、朝のミソ汁には油揚げ、豆腐、若布をとり入れデザートには煮干、レーズン、ピーナッツ、季節の果物を適量にとっています。

健康の要件としての快食、快眠、快便は全くその通りでこれこそその人の健康度の表示になるようです。私もこの三要件を満たして気持ちのよい毎日です。そのためにはなるべく無駄な神経を使わない。頭の体操として読書もつとめてやります。また健康のためになると言わることは大いに取り入れる。これはかつて青森相互銀行の頭取り唐牛俊世氏が九十九歳にして現職にありしかも死の旬日前まで、毎日朝礼で訓示を行ない庶務の一切を

決裁されたという方が、常に口にしておられた言葉に、「ひとが健康の維持に良いと言うことは總べて実行した」ということを聞いてから自分もまねて実施している。どうかこの機会にお互いが手を取り合い話し合って健康づくりの輪を広げようではありませんか。

最後に全国百歳以上の方一千九人が応えている現代の健康法を集約したその一に物事にくよくよしない。その二規則正しい生活をする。その三睡眠休養を十分にとる、健康長寿に秘訣があるのでなく、ストレスを解消して節度ある生活をするしか方法はなさそう。自分の健康は他から与えられるものでなく、みずからたたかいるものであります。

健 康 で 長 寿 を

日永ついたち会

後 藤 弥 一郎

一、四日市歩こう会で十年余り

歩くことが健康の基本であることは申すまでもあります。健康で長寿を希むならば、一日に二時間歩けとか、或は一万歩をと書物には書いて有りますが、これに近い歩きかたをしている方は一番多いと思います。私も二十年余り歩きました。平坦な道ばかりで無くて坂道を。又階段を加えた方が良いと思い、九十三階段の白髭神社と、坂道と階段のある忠靈塔の参拝を、又当市の南部丘陵公園内等を行程の一部に加えました。又踵を擧げて歩いたり、大急ぎで歩いたりして効果の大と時間の短縮を図りました。

健康で長生きをしたい。之は人間長じて後誰もが抱く最大の念願であります。此の念願達成のため、自分は如何することが一番良いかとよく考えた上、何かの健康法を選んで実行している方が多いことと 思います。私も此

当市の歩こう会に入会して十年余りになりますが、月二回の施行日は私にとっては一番楽しい日であります。現在の会員中での大先輩八十八歳で健脚の月山孫一氏をお手本として会員の皆さんと一緒に今後も歩き続けたいと思っています。

二、階段の昇り降り三年余り

健康の大黒柱とも言うべき心臓と、足腰の老衰を遅らせるには、階段の昇り降り運動が最も良いとの説を信じて始めました。それ迄の徒步中心を之れに切り替えたわけです。小古曾一丁目の国道一号線の歩道橋、一往復六十八階段、一日に二十一往復、之を三回に分け、始め二往復は一段一步、次ぎからは二段一步、登りは全階段、降りは二十四階段を。現在の處此の様に行って居ります。所要時間は合計で一時間です。此の様な完全な設備を利用させて頂ける幸せを感謝し乍ら、今後も之を続けたいと思っています。

三、たわしで全身まさつ二十年余り

古くから相当広く行われている乾布まさつに比べ、効果は大きいに違いないと思って始めました。やり方は至って簡単、先づ台所用の亀の子タワシを二個又は三個用意します。一個は脊中用ですから、布製の縄をつけます。始めにコンクリートの上で十分こります。皮膚を傷つけないためにです。心臓から遠い部分からこすり始めるが良いとのこと。私は朝のテレビ体操の前と、入浴後着

衣の前に七、八分間行って爽快な気分を味わっています。之を行えば胃腸はきっと丈夫になり、高血圧症にも良いことがあります。おためし下さい。（八十五歳）

私と西式健康新法

桜地区たのし会

伊藤源一

人間此の世に在る意義は、少しでも立派な事業をなし世の為人の為「タシ」になることをすることで、これが「永生」の道であると、子供の頃から教えられて来ました。

爾來馬令七十年、友は次々去つて今度こそ俺の番だと分つて居乍ら「人や先、人や先」とうぬぼれと「我」で通して居る姿こそ「あわれと言うもおろかなり」か。

晩酌三合と義理付合酒は欠かすことなくと言う憐れな凡夫を見かねた「ゴカイサン」様は一年半前、高血圧脳血栓というお炎を下され、せめてあの世へ救い上げ様と憐れみを垂れ給うたが入口で「エンマサン」から「未だ此の世の罪業が償い切れて居ない」との理由で突戻され又皆様方に御付合願う事になりました。然し最近になつ

て「一体俺の人生って何だったんだろう」と反省し、今度こそ「エンマサン」に快く迎えて貰える様努めなければならぬと感ずる様になりました。然しこれを実行するには先づ何よりも健康な体を作らねばなりませんが老朽化した機械は最早や医者や薬では修復困難な状態となつて居ります。

茲で思い当つたのが昔少し嘗つた事のある西式健康法であります。私は曾て妻の顔面丹毒を十日間の西式断食療法により根治した事があります。當時顔面丹毒と言えば半数の死亡率がありましたのでそれでは承知出来ない、絶対安全な方法をと西式療法に拠ることにしたのです。今回の私の脳血栓にしても最初は入院処置を受け、どうにかふらつき乍ら歩ける様になりましたが何時また転んで中風になるかも知れぬ危険性があつたので西式を始めたのです。此の療法を茲では細かに言い尽せませんので私が実行して居る運動の一部を御紹介申し上げます。

先づ次の基本運動を行ふ。

一、板の上に寝る平床寝台。

二、半円筒の木枕をする硬枕利用。

三、背骨を魚が泳ぐが如く振動する金魚運動。

四、四肢を上にあげ振動する毛管運動。

五、両手掌両足裏を合せ坐禅する合掌合蹴。

六、左右に搖身し腹部を出し入れする背腹運動。其の外温冷浴、生野菜食、生水飲用、玄米粉生食、賦活浴等を励行して居ます。御蔭で九分通り快癒致しました。簡単な様でも実行となると家庭環境、周囲の状況等に支障され難いものです。

それで老人会等に於ては踊りや歌の会等皆が集まる場を兼ねて少し宛研究実践することにすれば今からでも遅くない、何よりも面白楽しく「ゲートボール」の様に遊び乍ら人生最大目標に向つて一步宛前進出来得ることを確信致します。皆さん百二十歳まで有意義に生きましょう。

西式の著書もあり、修業道場もありますが小生から御案内も申し上げます。

長生きの秘訣

県地区長寿会長

阿部 鉄一

私は現在七十八歳です。私も青年時代から機械が好きで何でも動くものを見ると原理の分かる迄見なければ氣

がすまないと言う人間で色々と農具を造つて家の為には随分仕事もしましたが今はもうなるべく遊ぶ事に一生懸命です。

それは何かと言う迄もなくゲートボールをする事です。

これによつてよい運動になり、又人に接する事により色々とおしゃべりをして腹の底から笑う事です。ゲートボールをして居るともう家の事を忘れて面白く遊ぶ事によつて、いたい所も痛くない様になりだんだんと若くなる様な気がします。自分のからだを達者にすると言う事は家のよくを捨てて他人と接して面白く笑う事です。あゝ自分は誰よりも長生きをさしてもらつたと言うよろこびの心を持つて生きましょう。もうこの世へは二度と出来られないのですからこの世だけでも楽しく暮らしましょう。そしてなるべく家のよくを捨てて一家のする事に対し何の世話もやかず自分の身だけ守ればよいと言う気持ちで生きましょう。

そして又からだのいたい時は今度出来た西老人福祉センターへ行つてゆつくり湯につかって痛い所はこの温泉でゆつくり直していく迄も長生きをしましょう。

私も手が痛かつたけれど三回程この湯に入つたら直つてしまい、又ぢ病もありましたけれど度々温泉へ行くお

かげですっかり直りました。皆様もなるべく温泉へ行ってからだを達者にしましょう。そうして福祉施設の充実で結構な世の中になつた事を感謝しよう。



ゲートボールの奨め

中央地区浜町明治会
竹原誠一

私が「ゲートボール」を知ったのは昭和五十二年春です。当四日市市役所社会課に於て、老人福祉の一環として、健康保持のために、この競技が推奨され、市体育指導委員の協力を得て始められました。

最初は、家の中にこもり勝ちの老人達は、新しいスポーツを始める事に戸惑いもありましたが、競技は簡単でルールも分り易く、男女の別なく共に楽しめる軽い運動でありました。保健のためばかりでなく、新しい交友が広がると共に、現代社会に大切な「和」の精神が発揚され、人生の幸福に一層の精華が添えられるのであります。

競技は、縦十五米、横二十米のコート内に一チーム五名の選手が紅白二組で各五個の球を交互に打ち進め、三ヶ所のゲートを通して中央のポールに当てて得点を競う

室外スポーツです。試合は、四米先の第一ゲートを一打で通すことから始めます。これは個人技ですが、この通過によって、監督は作戦組立てが可能となり、チーム全体を指示し勝敗の行方に大きく影響します。精魂込めた一打にもその巧拙によって、ゲームの展開にはげしい変化が生じます。これは競技者やチームには、とても大きな魅力となります。

昭和五十六年五月二十四、五日の両日にわたり、主催四日市ゲートボール協会、後援、四日市市役所で、中部日本選手権大会が開催されて、中部七県から七十四チーム、選手役員六百余名の精銳を迎えて盛大に举行されました。八十歳以上の方や、腰、耳、足等の不自由な方が年令や障害を自ら克服されて、若者以上にハッスルし、全神経をステックとボールに集中して堂々たる戦いぶりの姿や、審判員の敏速なる行動と大きな声で正確に判定を下す態度を見る時など、これこそ「我等は家族」と胸おどらせ「和」の真隨にふれる想いを感じました。

四日市市教育委員会、四日市市老人クラブ連合会、市体育指導委員、市社会福祉協議会等の協賛を得て、四日市ゲートボール協会連合会が結成されました。現在愛好者は四千名を突破し、約二百名の審判員も充実し、益々

隆盛をきわめております。

今やスポーツは、見る時代から、参加する時代にと進み、自らの体力に合せて、いつまでも持続性のあるスポーツとして、老若・男女の別なく、各層の方々の御参加を頂き、益々発展することを切に願望いたします。

全日本ゲートボール協会連合会

公認二級審判員

今日こそと 年甲斐もなく意氣さかん
初打ちや 先ず払いけり屠蘇の醉

吹雪にも めげず追いける 晴れの楯

寒業に 心意氣して 春を待ち

ゲートボール讃歌

下海老町大池

うさみ 丹草

健康と楽と笑いのグランドに

煩惱消滅 それここに在り

いみじくも 風邪一つ引かず春迎う

雨足に 球の幻想 明日を待ち

球音の さえかえる野や 揚げ雲雀

球の腕 行きつ戻りつ紅葉橋
数を重ねて おいおいの坂

極楽の 門やここぞと 丁と打ち

やぶ鳶を 背に聞きつゝも 球を追い

萬物の理は 球にありとてか日もすがら

世の憂さも この一打ちや 五月晴れ

見合わして 笑うばかりなり 頬の焼け

日もすがら 球に興じて 百舌しきり

球に興じ 老いを忘れる 日の長さ

昨日まで 興じし友や 朝の露

球に明け 球に暮れして 茶話しきり

老人クラブとゲートボール

御館長寿会

伊藤 章

近年急速にゲートボールが普及して今では殆ど老人会専用の団体競技の観があるようになつて来ましたが、今ちょうどまがり角に来ているのではないでしようか。私は次の三項目を老人クラブのゲートボールとして提言したいと思います。

一、ゲートボールのルールの簡素化。

二、試合に勝つことより愛好者をふやす。

三、ゲートボールは営利に利用されるな。

ゲートボールは私も大好きですし、趣味と体力づくりとを組み合せたよい団体競技だと喜んではげんてやつていますが、あくまでも健康保持が第一条件です。

ところがゲートボールの試合、勝敗にあまりにもこだわりすぎてきた様に思われます。それにルールのあまりにも神経のこまさ、それはゲートボール協会としてのスポーツとしてなら妥当な行き方でしそうが足腰のひよわな、視力の弱い老人が楽しむスポーツとしては、あまりにもルールが厳しいではないでしようか。例えばスパーク打げきの時、球が少しはなれていた、ステックの中央より下に指がふれていた等々でアウトを宣せられてすごすごと引き下がる姿をみるとあわれで見ていられないので。又勝敗よりもゲームを楽しむ人を増やす様にもつてゆきたいものです。ゲートボールに強くなるより、ゲートボール人口をふやす、底辺をひろげてゆくような方策をとるのが老人クラブのゲートボールに対しての考え方ではないだろうかとつくづく感ずるのですが、如何でしようか。

ルールと云う制約のなかでプレーを進めるのが競技な

のだから勿論ルールはなければならないのだが老人クラブの競技では足腰の不自由の体で嬉々としてプレーをたのしんでいる人が、足をふみはずしたばかりにアウトになるのでは如何なものでしょうか。

ゲートボールが老人専用の競技のものであるならば足腰の不自由な人々のための簡素なルールと体力増強の協会用のものとの二面があつてもよいのではないでしようか。

教えられる言葉

要するに私はゲートボール試合に勝つと云うよりも、これを愛好する、健康保持の人々をふやすのが老人クラブの行き方だと思うのです。

私は日頃新聞等で気にいった言葉、教えられる文を発見すると手帳に書きとめる。その二、三紹介してみましょう。

○「若くして学べば壯にして為す。壯にして学べば老い衰えず。老いて学べば、死して朽ちず」（佐藤一斎先生）

○「美しく死ぬのはそれほど難しくはない。美しく老いるのは至難の業である」

○「労使は対立するものである。協調はないが妥当はあ

る」
○「けつしてウソをつくな。約束したことは家を売つても守れ。五年で返すメドがあれば、八年の約束で借りよ」。

生きがいをゲートボールに託す

塩浜ゑびす会

村井 新之助

私は「老人」と言う言葉に反発を感じる程若い気持ちで居ましたので、老人会とは縁遠いものと思つていましたが、緑地公園で老人会のゲートボール大会を見てその思いが変わりました。

五十五年四月、老人会に入会して有志十三人で私有地を借りて、六月からゲートボールの練習を始めました。初めの内は、打球が狙い通り転がらず、ゲートの通過、他球へのタッチが思う様に出来ず、苦労の連続でした。

それも練習を続ける内に楽しいものに変わっていき、その成果を發揮する塩浜地区ゲートボール大会が十一月九日、小浜町グラウンドで行なわれ大里チームは、御園、塩浜、小浜チームに勝ち優勝する事が出来ました。

小浜チームとの試合は実力伯仲の熱戦を展開し、同点で試合終了。勝者決定の第一ゲート通過競いも三回行う烈しいものでした。

表彰式で賞状と盾を受け取った時、厳しい試合をして手にしたものだけに、喜びは格別なものでした。

明けて五十六年二月、市南部地区ゲートボール大会が中央緑地公園で行なわれ、北風吹く肌寒い日でしたが皆元気に関係者のあいさつや注意事項を聞き六つのコートで試合を行い、大里チームは第二コートで応援者の「頑張って」の声援で、白熱した試合を開いたものの一回戦で敗退したが、試合中に技術面で多くの事を学び取ることが出来、いい経験をしたと思う。

三月二十九日、第四回の塩浜地区ゲートボール大会が小浜町グラウンドで行なわれ、当日は晴天に恵まれ絶好のスポーツ日和で大会関係者のあいさつや注意事項を聞いたあと試合開始、大里チームは海山道、小浜に勝ち、馳田チームに負けて三位入賞。

四月五日、三滝公園で行なわれたゲートボール大会に二チーム出場。AはAブロックの川島D、BはHブロックの保々Bと対戦、AB共敗退しました。

その事よりも第四回老人ゲートボール大会に出られた

ことを誇りにして、技術向上のため練習に励んで行く決心を致しました。

九月二十三日、雲一つない秋晴のスポーツ日和に第五回塩浜地区ゲートボール大会が小浜町で行なわれ、大里チームはこの大会に入賞を目標にして連日三時間、大会前の一週間は五時間という練習をして臨んだところ、一回戦の御園チームとの試合に負けて、大里チームが受けた大きなショックとその悔しさは今でも忘れる事ができません。

翌二十四日、八月受験した審判員試験に合格したとの通知を受け取った時は、ゲートボールを始めた目的の一つが果せてほっとしました。

今後はこれに満足することなく練習と技術の向上に励み、生きがいを託すゲートボール発展のためこれからも頑張って行く決心です。

私とゲートボール

内部峰寿会第二会長

仁保邦夫

私は昭和四十七年三月末、同僚十五名と停年退職し、

翌日船員会館へ夫婦住込みで再就職しました。

五年後八名も亡くなり、特に親友の死に悲しみの余り卒倒し救急車で入院しました。

以来健康第一と痛感し三つの事を実行して居ます。

一ツ 夫婦でジョギングを始めました。

家内よりの半ば強制ですが、今は喜んで居ります。

朝六時、内部川に沿つて速歩で五糠をおいしい空気を吹いながら軽く汗をかきます。永続の方法は夫婦で歩く事です。

二ツ 四日市歩こう会に毎月二回参加します。

五十名以上の老人が野山を越え、野仏に手を合せ、神社仏閣に参拝し、童心に帰り歌いはしゃぎ、時には黙々と十五糠以上を踏破します。初心者は八糠よりだんだん延すのが最良です。

亦八十歳前後の男女老人二十名が町の公会所に集り、三十三番御詠歌をとなえ、月一回お互いの健康を手を取り合って喜びます。

三ツ 私はかねがね皆んなで楽しい運動をと思い、

三年前ゲートボールの講習に参加し老人の健康増進には最適だと確信しました。

家にこもりがちな老人に再三すすめた処、友達の歓声を見聞して次々と加入し、現在では内部地区で十八チーム百五十名の老人が、平均週三回、青空の下で熱中して居り、市内でも三千人以上の男女が楽しんで居ります。

競技は一試合三十分。十人目に一度順番がきます。

休憩中は球の動かし方等、互いに作戦を練り、昔話、孫自慢に花が咲き、次々とゲートの友が増え孤独になりません。動作も活発になり自然と肩こり、頭痛も治り食欲も増えます。最近市役所の調べでは、医者にかかる老人が少いそうです。

成績は、内部中掘チームが四日市大会に連続二回優勝し、三重県代表として第二、第三回の全国大会に連続出場しました。

第二回の焼津市では、全国百三十四チーム中上位八チームに勝ち進み、第三回の熊本市では、二日間全国百六十八チームと戦い、小生監督の中掘女子チームが上位十六チームに入る好成績でした。

監督兼選手、仁保邦夫。仁保つゆ。海渡こう。小林美栄子。中川利三。

八十歳の奥西選手が健闘し特大の金メダルを受領しました。中部大会等に五回優勝しました。

私達夫婦は二級公認審判員です。

一番嬉しかった事は、六年生の孫がサッカーの選手で日々鍛えられ勝つ事の苦しさを感じており、九州への遠征には「じじ」「ばば」ちゃん、「やるな、頑張って」の一言で勇気百倍し勝ちました。

八十一歳から平均七十一歳の選手が、全国大会連続三回出場を目指し、毎日四時間励んで居ります。

ゲートボールの思い出

橋北ゲートボール部総監督

村木真一

私達は他に頼る以前に私達自身の問題として、家庭や社会に迷惑をかけないよう、自分の健康は自分で守り、明るい社会、たのしい日々を送る様心がけ、意義深い年齢を超越し、豊かな心で体をきたえましょう。

きたえるには私たちの年齢に適したスポーツ、それはゲートボールではないでしょうか。ゲームをしている時、人生に青春をもたらす秘訣があり、毎日が若々しくプレー

ーを開発でき、自分の体に自信が持てます。

西橋北老人会の爱好者によつて始められたのは、四年頃より、春夏秋冬一日も休まず練習に励んで来ました。現部員の方々は風邪一つひかず、希望と生き甲斐に満ちた生活をしています。又、五十四年度大会に五十四チームが参加して競技大会が行われましたが、私等西橋北チームが優勝し、三重県代表として埼玉県で行われる第一回日本ゲートボール選手権大会に参加致しました。

市の壮行会に市長さん初め、皆様より激励のお言葉を戴き、選手一同身にあまる光栄とバンザイの声に送られ一路東京の代々木オリンピック村へ……。

年は七十歳でも気持は青年に成りきつて、各地の代表チームと夜の更けるのも知らず、ゲートボール談議に花を咲かせました。かつては世界各国の選手が、この部屋で、自分らがやっている様にオリンピック談議をした事でしょう。

翌日迎えのバスに乗り草加市の会場へ、開会式には陸上自衛隊第一音楽隊のマーチに合せて、入場行進の気分は最高。いよいよ試合開始、六十八組が十六面のコートで熱戦。私等は第七コート、相手は地元の草加チーム。

プレー・ボールの声でスタートラインに出たまでは良かつたが、選手一同コチコチに固くなつて、することがちぐはぐアウトを取られてさんざん。結局負けましたが選手一同、大変大きな勉強をさせて貰いました。

私等が作戦を知らず、早く上がれば良いと、それに力を入れたから……、試合なればに熊本の天水チームの方が、私のあとに付いて三番を打て！六番に付けろ！とか四番を打て！八番をダブル！合せ打ち等、色々と教えて戴き、なるほどと、全国大会に来て負けはしましたが、本当のゲートボールを知り、何よりの参考と胸をはずませ、帰つてまいりました。全国大会で知った試合のコツを皆様にお伝えして今日にいたつて次第です。

又、昨年は埼玉県ゲートボール選手の方々がバス三台で四日市へ来られ、親善試合を行い、第一回全国大会の思い出話しに心あつたまる一日を送りました。

四日市の各地のチームの皆様、いろんな面で本当に立派なチームになられ、どの地区のチームも甲乙つけ難く行先が楽しみです。どうか皆様、益々技を磨き立派なチームづくりに頑張りましょう。

スポーツから遠ざかって行く高年層の体力づくり、老若男女の別なく出来るスポーツは、ゲートボール以外に

はないと思います。明日とは言わず今日からでも始めて下さい。



想い出・旅の感想

慶應会の旗（思い出記）

四老連会長
安藤 正一

各地区にある慶應会の旗のいわれについて思い出を語ります。



明治の末頃、四日市に住む慶應生れの名士の方がたが遊び友達をつくり会名を慶應会と呼び月一回程度、生きがいに打ちこめる趣味として囲碁、将棋などを大切にして心身ともに健康な人生觀を味つて一番最後まで長寿された方の記念品としてお祝いするため大金盃を

作り時折りこの盃で酒盛りを楽しみ「若返りホルモン」と呼んで老化防止に努めて見えた。

最後の長寿者は小管劍之助様でしたので、翁は貴重な大金盃を家宝として保管されて見えたが、昭和十九年頃、大東亜戦事中に国家へ供出されたのであります。

金盃が余りにも立派な物であるので潰さずに終戦となり供出の持ち主に戻されたので、小管翁はこの大金盃を市役所へ寄附され社会福祉に役立てて下さいとの事からこの金盃の代金の一部で昭和三十九年九月、当時四老連に入っていた各地区の老人クラブへ慶應の旗を一本づつ戴いたものである。

先輩は何んと有難いことではありませんか。

現在の環境を思う

大矢知地区緑寿会会長
伊藤 良三

表は強い西北の風に粉雪を交えた風音を窓越しに聞きながら、七十七年の過去を臉に浮かべ炬燵に足を入れて免や角と想に耽ける。人生も終末に近き事を思い感慨一入、只至らざる事の多きを考えつつ。

さて、何が残ったか今あるものは白髪頭に顔のしわ、

偉そうな顔して欲張りで憎まれ口は人一倍、お陰さま有難いとは仲々云えず、過去から現在只今でも神仏の御加護のある事にも気付かず、死んだらどうぞ阿弥陀さまお頼みしますと手を合せ、氣儘に其の日を無駄使い、たまには不幸や愚痴もこぼれます。大きな声も出しますが凡夫の事や御免してやと。あんまり勝手すぎはせんやろか。死んでゆくのは人の事、自分事は棚に上げ恥かしい限りです。

これで一生はい左様ならでは何しに婆婆へ出たのやら情ない次第です。こんな不埒な私でも長い間飽きもせず、周囲の方に見守られて生かされ有難い事でございます。

昔やつたら姥捨山とうの昔に鳥のえさ。でもこのごろは老人老人と大事にして貰えます。病気になつても医者はただ。年金沢山戴いて年に何回となく観光旅行。食生活もこの頃は贅沢の限りです。罰が当らせんやろか。こんな社会が出来たのも、あの大東亜戦争で灼熱と酷寒と疲労に加え、喉の乾きや飢と戦い、終いに餓死した戦友の如何に多かりし事を思う時、不平や不満は言えません。之も天皇陛下を中心とした日本国に生まれた事を喜びたいものです。

神宮初詣と朝熊の旅

日永ついたち会

丹羽貞雄

日永ついたち会の伊勢神宮初詣と伊勢志摩スカイラインの旅は天候に恵まれて楽しい一日であった。毎年のことながら五十鈴川の清流に手を清めてしめた玉砂利を踏みしめて内宮の拝殿の前に立つと身の引きしまる思いがする。初詣の混雑をさけるため設けられた帰りの板の道はまだ残されていた。全国から多くの人達の踏みしだ板は少しすりへつているように見えた。

五十鈴川流れすがしく朝の陽にきら

めく水に手を清めたり

はるばると参りし人の足跡が桧の板

に染みいるごとし

宇治橋前に集合した私達はバスに分乗して伊勢志摩スカイラインを通つて朝熊山頂に向つた。十国峠のようにくねり曲った路をバスはゆるゆると登つて行く。はるか眼下に志摩の紺碧の入り海を眺めていたら、やがて金剛證寺の総門前の駐車場につき陸橋を渡りて仁王門の前に

立てば眼を見はるばかりの色あざやかな建造物である。

昭和五十四年に再建されたと。昔から神宮との関係が深く、俗に「お伊勢参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参り」とうたわれ、民衆の信仰の厚い寺である。門をくぐると右手に弘法大師が堀られたと伝えられる連間の池があつた。池の中ほどに有名な太鼓橋がかけられていた。この橋は寛文十三年ごろの創建といわれる。

水少なき連間の池にかかりたる太鼓

の橋に冬陽あかるく

右側に仏足石を見て本堂に参詣してしばらく進むと、彩色あざやかな極楽間があつた。奥之院に通ずる参道に無数の供養碑、古石碑等が林立して信仰の深さを示していた。

朝熊山頂は強風注意報が出ていた通り吹きあげる強風に急ぎ食堂にはいり、準備されていた昼食に楽しい一ときを過した。海拔五五三メートルの山頂の強風はなかなかやまらず、ゆっくりと雄大な伊勢湾口の風景を眺めることができなかつた。

朝熊山風荒々しくてオーバーの裾ま

きあげて吹きぬけてゆく

見はるかす鳥羽の入海陽に映えて鏡

のごとく輝きており

再びバスで山をくだり、鳥羽駅前につき青空号にて楽しかつた一日の旅を老友と話しながら帰途についた。

老人のうた

生きていし甲斐ありたるか熟年という
言葉生れて古稀を迎える

階段の昇り降りもいつよりか手摺りを

頼る身体となりぬ

若くして離れし村を恋しみき老友病む

便りしみじみと読む

四老連結成當時の思い出

西橋北福寿会長

斎木錠之進

私は、昭和三十五年十二月四日市役所を退職、翌三十六年市社会福祉協議会長故岡村三治郎先生からの進めて同協議会に嘱託として再就職し一年後の三十七年一月、常磐老人クラブ会長の故山口政夫氏より四日市老人クラブ連合会設立の懇請を受け、直ちに四老連の規約り取りかかり三十八年四月、クラブ数二十二、会員数二千五

百余名で連合会長には故山口政夫氏がなり、会長と私で連合会の運営に当ることで発足したのであります。本年には国の老人福祉法が制定され、その後、老人福祉年金制度が出来て、七十歳より老人医療無料化となり私達老人には有難い世代となりました。

三重県老人クラブ連合会も、三谷会長のもとに三十八年発足し四日市からは、故山口政夫氏が県老連副会長に選ばれ県老連の発展にも大いに貢献されたのです。

四老連の初代会長は故山口政夫氏で約十年その職におられ病気のため再起不能となり会長を引退いたし、現会長の安藤正一氏が引継がれ、中期の行事育成時代を現会長が確立されたのであります。そして今日ではクラブ数約二百、会員数一万六千余人と大世帯となり今想えば誠に感無量であります。

連合会結成当時の状況の一端を述べますと、会員の健康と親睦を計る事を第一目的とし、レクレイションを主体とした一泊旅行、日帰り旅行を始めました。

先づ最初は日本交通公社による国鉄を利用した各温泉地へ旅行し、或は三重交通観光社の企画により北は北海道、南は九州へと一泊から三泊の旅をバスや飛行機で全国各地の温泉旅、本当に楽しい想い出だった。

また日帰り旅行の始まりは、昭和四十一年九月、当時の近鉄四日市駅長協賛のもと近鉄沿線各地をあおぞら号の貸切電車で旅行し、この例が現在も継続しております。おわりに当り四老連結成二十周年を迎えることができましたのも、これひとえに役員を初め会員皆様ならびに市当局の深いご理解と積極的なご協力の賜もと深く感謝申し上げますと共に今後の発展を期待するものであります。

物故会員追弔法会の思い出

小山田老人クラブ連合会

須藤成春

回顧すれば十年前の昭和四十七年九月十七日、小山田

地区老人クラブ連合会物故会員追弔法会は、山田町の安性寺に於て実施されましたが、物故会員への言葉の書面が保存されておりますので記載します。

小山田地区老人クラブ連合会の物故会員の皆さんに一言御挨拶申し上げます。秋の彼岸に近い本日、私共会員は安性寺本堂に於て皆さん方、昭和三十八年小山田慶寿会発足後、

十年目の今日まで百五十余名の物故された会員皆さんの靈をお迎えしました。そうして私共は皆さんのが在りし時の皆様から教えられたこと、楽しく話合つたこと、又共に旅行など致しました事等を追憶して慕はしくも懐かしく、感々に迫る想い出にひたっています。

合会長を兼任された方でありますたが、五十一年三月二十八日物故会員となられました。尚参加役員二十五名の内現存の方は十二名で過半数の方は物故者です。
先輩の業跡を残すため執筆しました。

思　い　出　の　記

東坂部長寿会

一　海　喜之丞

昭和四十五年春以来、夢のように月日が過ぎ、東坂部長寿会々長として、私なりに懸命に会員の健康と生きがいの道を尋ねて十二年が過ぎ去った。短いようでも長かつた日々を今振り返って見て、痼疾の心臓をいたわりながらの毎日だったが、この老体も今は限界を感じて、若い人へのバトンタッチを真剣に考える近ごろである。

四十六年の夏、館賢一氏が三重長寿会連合会長を辞任されて、単位クラブ会長歴二年目の私にやれということであり、若氣の至りというか、盲蛇に怖じずで、何もわからぬままに引き受けてしまったのである。幸い近くに顧問の稻垣勘助氏が居られることを頼みの綱として、前会長や顧問のアドバイスを頼りに手さぐりで、とともにかくにとして平尾靖二の言葉といたします。

当時平尾さんは東慶寿会長であり、地区老人クラブ連

も、やりとおせて来たのである。その前会長も顧問と、今は既にあの世の人となられ、ありし日の面影を偲ぶばかりである。

私が地区連合会長になつたころの老人クラブ活動は、今と比較して大変な相違で、市老連の行事に辛うじて参加する程度のものであつた。

二年毎に改選されて出て来られる単位クラブ会長様たちの中にも、前向きの積極的な人材があつて、毎月開かれる会長会で次々と活動計画が出されるようになつた。殊に坂部ヶ丘、三重平の二単位クラブが結成合流して、純農村地域に団地の息吹を吸収することが出来、年を追つて活動が活発になつていった。

健康保持のためのゲートボール熱は今や花盛りで、スポーツウェア姿の老人が歩する時代で、実に隔世の感がする。

各単位クラブごとに毎月一回「憩の家」の集会を申合せ、いろいろな情報交換や旅行ニュース、交通安全への注意喚起など、話合ひ交流の場として、その日を待かね、乳母車を押して三三五五集つて来るほほえましい姿は何とも云えない。

年間二回、春は三月、秋は九月、クラブごとに集会所で全員参加を目標に講師先生を迎えて研修会を行なっている。会員の知識向上を目指して、また老人の生き方、あるいは社会情勢を聞くなど、会員から大変喜ばれている。またかつて「みえの民話」「むかしの知恵」という冊子を編集発行して地区内外から好評を頂いたことがあり、古い文化の伝達が老人クラブの是非なさねばならぬ活動の大きな仕事であると考えている。

ともかく昔と違つて、会員意識が一段と高まりつつあることはうれしいことである。

老人クラブ創立二十周年に当たつて、心を新たにし、更に発展と前進を期すると共に会員の長寿と健康を祈つて筆をおく。

藤田平太氏と、学事関係者四名で一団が構成された。

若き日の思い出

桜地区たのしみ会連合会
石川半七

私が十九歳の時「大正十年」明治神宮御造宮工事奉仕団が編成された。団員は各町村から推薦された、六十余名、期間は七月十五日から二週間、団長は当時郡視学の

作業奉仕班は数班に分かれ、全国からの献木を植込み支柱建て、参道路面固め、トロッコによる土砂運搬、橋詰めの埋戻し、延モッコの土砂運搬、七月の炎天は全身汗、白の作業服は赤黒で泥んこ、奉仕は全国から次ぎ次ぎ来場、かくて広大な宮域の完成をみた。

歳月は流れ、現在の莊厳な神宮となり、神殿には天皇の英魂鎮まりまして、御遺徳を忍い国民の参拝はもとより、高位高官の正式参拝、神宮ならではの現況、昭和四十年正式参拝が許されて参拝、その後十年を経て団員御遺族の方々とともに、正式参拝をさせて頂きました。

奉仕当時を忍び、毎年一回会合を催し、当時を語り合う、憶うに団員が、町村推薦であり、東京と云う憧れ、榮誉ある奉仕者の自負は団員の真面目さが作業に現われ、奉仕を高く評価されたものです。

次いで大正十一年徵兵検査に合格。翌十二年一月十日守山歩兵連隊に入隊、軍隊の生活が初まる。格子なき牢獄とは石畳の歩道、廊下を上ると一側に三八式歩兵銃がありこの情景と、軍規の厳しさを言つたものか。歩兵操典による各個教練から初まり、殺傷の基礎訓練迄を修得第一期の検閱を受けて第一課程を終了する。

私は選ばれて名古屋陸軍病院で衛生兵教育を受ける事

になつた。教育兵七十余名、この教育がテスト、テストで席次が変わるシステム。最初はあまり気にしなかつたが一寸とおかしいと感じた時「軍隊でも裏のあると云う事」気の付いた頃は席次ががたがたと、下降線を辿つた。どうする事も出来ず、田舎者の百姓、こんな事露知らずなんと半数以下の成績をもつて、軍隊に帰着し、上官「教育教官花本少尉陸士恩賜時計組」に報告するや、一喝貴様たるんだなと、散々油を搾られた。教官の期待を裏切つた形、不徳の致す処と諦めて、隊は衛生兵として平日は医務室勤務、演習日は隊に随伴して、演習が初まる中隊長の自転車を演習終了予定地迄坂道を運んだものです。

かくして十二月一日には星の数も増えて、翌年一月に入隊する初年兵を迎へ、愈々二年兵となる。除隊の日迄の飯数を勘定する。二年兵は神様、食器や洗濯物は初年兵が洗う。私は七月十日、一年六ヶ月の期を終えて除隊中隊会前に整列して私を見送つて呉れたが、別離の場面は感慨無量、感傷の涙をこらえて挨拶もそぞろ、名状しがたいものでした。

思い出の二三

日永ついたち会

伊藤健介



昭和37年10月21日 第一回運動会
来賓競走 大原女スナップ

日永ついたち会とは何の会かと、以前は不審顔の人が多かった。今ではついたち会といえばあの老人会かと、わかつてもらえる様になつた。昭和三十五年十月一日の設立で、初代会長増山英一、副会長山川亀次、太田かくを中心には地区内有志が日永公民館長等の協力を得て、既に結成の常磐老人クラブなど二十三のクラブを参考に、

老人問題の喧しくなつて来た世情に対応すべ

く、他に卒先して老人の福祉増進を目指して結成の運びとなつた。

変つているのは会員の年齢で、一般には六十歳以上となつてゐるが、当会では五十五才以上となつてゐる点で

ある。定年退職者がすぐに入会できる様にしたもので、老人というみすぼらしい感じを脱却して若さを取り入れたものと思われる。会名の日永ついたち会も毎月一日を定期役員会の日として運営していく意味を採つたもので、

他に先んじて各種の活動をつづけて来たのである。

昭和三十七年五月十一日第一回四日市市老人クラブ大会に際し、優良老人会として表彰を受け、公民館前庭に植樹して記念とした。

同年十月には第一回秋季大運動会を公民館、婦人会、青年団等地区の皆様の協力を得て開催した。山口政夫連合会長も元気で来賓競走に出席して下さつたのである。亦來二十年、昨年は第二回の運動会を済ませた次第で、会員の楽しみの一つとして喜ばれている。

三十八年には民踊部が誕生、福持きくの先生の指導をうけて大いに張り切り、市内外の老人クラブから招待をうけて出張したこともあつた。今となつては各老人クラブ共、お立派になられたが、当時としてはついたち会といえど踊り達者で評判であつたと記憶している。

その後、茶の湯のグループ、囲碁のグループも生れ、それぞれ毎週一回、公民館（地区市民センター内）の一室を借りて修練に励んでいる。最近ゲートボールが盛と



昭和37年5月11日 第一回四日市市老人クラブ大会において優良クラブとして表彰を受ける。その記念として植樹並びに建碑落成式を10月20日を行う。

なり、当会でも各部落にグループが出来て、それぞれに仮設練習場で、中には隔日に練習に励み、会員の健康と相互の親睦に効果を挙げている。

この間、増山会長は昭和五十五年三月まで二十余年間本会運営に格段の努力を続けられたのである。中央老人福祉センターの建設、誘致もその一つで、お陰で日永の老人は大へんに恵まれているのである。会長退任後も名誉会長として病床より声援を送っていたが、惜しくも五十六年四月永眠され、痛恨の次第である。

当会は五十五年四月より九つの単位クラブに分割独立し、各部落毎に活動を続いているが、日永ついたち会連合会としても統一行事を行い、長短相まって老人クラブの使命達成に一段と協力し合っている次第である。



隨

想

老後の生き方にについて

中納屋町老人クラブ入道会会长

寺 本 信 二

四日市市老人クラブ連合会創立二十周年おめでとうございます。

私も本年八月には満八十七歳になり毎日こうして健康で楽しく生きておられます事は、偏に地区老人会の世話役をさして貰つておるお陰と喜び感謝しておる次第でございます。

では私が平素感じております「老後の生き方について」一寸述べさせて頂きます。

年寄りはよく昔話をします。自分の歩んできた道を誇らしげに語ります。老人として時々は昔を想い出し、ありし良き日を忍ぶと言う事は如何にも楽しい事に違いありません。

然し過去に計り遡っていて未来が見えぬようでは其の人

には進歩がないのです。現在は呼吸もし血は流れても其の心は遠い昔のもので、生きながら死んでおるようなものです。

老人は未来に生きねばなりません。未来に生きると言う事は未来を見つめて現代に生きる事で、何歳になつても一日一日を前向きに生きたいものです。

老人が此の世に生きておると言う事は、唯命だけ生きのびておるのではありません。何等かの役割を果すよう社会も大いにそれを期待しております。

例えば老人クラブを通じ、又は個人的に一人暮しや寝たきり老人への慰問と激励、青少年や婦人会との交流、交通安全運動に協力する等、自分の知識や経験を社会の人々の生活や幸せの為め何とか役だててほしいものです。まだ此の外に国や市の選挙でも老人の一票は大きなものを使うのです。全国の老人がみんな投票しますと一千万票も集り、此の先老齢化社会が進むにつれ、どんどん増えますからこれらの政治家は老人を益々大切にすることでしょう。

然し口先だけでなく本当に日本を良くし、老人の幸せを約束する立派な政治家を選ぶ為には、常に新しい社会についての知識や理解、未来の社会についての考え方等

勉強をしたいものです。

日々の新聞は勿論、市主催の市民大学講座を始め地区市民センターの高齢者教室、其の他有益な会合に参加する等、勉強の機会は幾らでもあるのです。

今の若い者は未来に生きようと、現在の困難と四つに組んでそれを乗り越えようとするのです。年寄りは過去に生きがちです。そして現在の煩しさをそれとなく避け頑固に過去の正しさを主張して社会の移り変りに目を向けようとしません。これでは耽け込む計りです。耽けこむどころか恍惚になる心配も出てきます。

老人は生きている限り前を向いて歩き続けたいものです。

ゲートボール競技を始め見学旅行等、親睦の為の催しや有益な集りには努めて出かけ、社会の流れに竿さして前向きに正しく生きたいものです。こう言う老人は何歳になつても年は寄りません。又若者との解けあい話あいの出来る老人はこう言う人です。

これが永遠の若さを保ち、現在を正しく幸せに生きる老人の姿です。皆様元気で力一杯生き抜きましょう。

美　　老　　人

若葉会

後藤健一

最近の日本は、寿命が延びて、世界でも一、二の老人大国になってきています。この社会は、老人ばかりでもなければ、若い者だけでもありません。老若共にお互いに理解しあって、お年寄りも、若い皆さんとうまく世の中を渡っていくことを考えねばなりません。

私共はこの自分の生命も身体もみな自分自身のものだと思っていますが、実は生命も、身体も自分のものであつて自分のものではありません。みな天からの大切な預りものなのです。自分のものなら自分の思うまゝにすることが出来ますが、それが出来ないのは、実は自分のものではなく天からのお預りものだからです。私たちの身や心だけではありません、「自分の子ども」と思つていますが、それも、天からのお預りものです。だから自分の思う様にならぬときがあるわけです。自分の思うようにならぬといってなげき悲しみ、人をうらんやりするこ

大切な預りものでも、私たち生身の人間ですから病気をしなければなりません。年も、とらねばなりません。

おなじ病気をするなら、それじょうずに病気をしたいものですし、じょうずに年をとりたいものです。

体の病気は、医者の先生にお任せして、お指図どおり

養生し、早く治しましょう。心の病は、自分で修養して自分で治さなければなりません。身の病も、心の病も、病んだ時は、すなおに病みましょう。これが、じょうず

に病氣するこつです。治すために一生懸命修養が出来て、

年をとりながらどこか年をとらないところが感じられま。す。年をとるにしても、病氣をするにしてもじょうずに年をとり病氣をする様になります。こうして年を積み重ねてこられた方を美老人と云えるのでしょうか。

若い人が美男、美女、にあこがれる様に、私たち老人もひとつ若い人たちから羨まれるような美老人になる様

心がけましょう。若い人たちもやがては老人になるのですから、その人たちのためにも私たちが美老人になる心がまえを身につけて、励みましょう。

「もうひとりの私」への感謝

三栄町福寿会

田中正次郎

昨年十一月洞川の御手洗渓谷を探勝し、見事な紅葉を賞でていましたが、足をすべらせて倒れ、右手首に裂傷を負いました。

治癒には一ヶ月近くもかかりました。

その治癒には「私」は手をかすことは出来ず、医者に軟膏を塗つてもらつていたほかは自力で治癒しました。

私は医学の知識はありませんが、血液中の赤血球は酸素と栄養を運んで、裂傷部に活力を与え、修復に努め、また白血球は腐敗菌などと戦うため大奮闘をしてくれたからだと思います。

それらを働かすために、心臓は血液を送るために献身し、肺臓は血液に酸素を供給して倦みませんでした。私たちの健康は、この「もうひとりの私」の犠牲の上に成り立っているのです。

まして老境に入ったものの身体の整備は、大へんでしょう。老いてゆく身体を補強し支えてゆかねばならない

からです。

「私」は「もうひとりの私」に心より感謝し及ばずながら協力せなければならぬ義務があると思います。

酒を飲みすぎて「もうひとりの私」の営みの邪魔をしないか。タバコをすいすぎて、修復の妨げをしないか。夜更かしをして整備の時間を少なくしあらないか。反省が必要です。

道を歩くとき、ふと油断して、心臓をびっくりさせることがあります。すまないことをしたと思うことがあります。「もうひとりの私」の存在は、神仏は判らなくとも、納得ゆくと思います。

私は神仏の前に額すくとき、いつも「もうひとりの私」を念頭に浮かべ、神仏に祈念するとともに、感謝の誠を捧げています。

勿論腎臓も、脊髄もその他の機関も総動員されました。それは終日です。昼も夜も休まずの苦闘でした。私の不注意な過失からこんな目に合わせたかと思うと申し訳ありません。

この修復のための働きは、私の意識や「俺のが」と思う自分の外の機能が果してくれたのです。

この「自分の外の機能」を私は「もうひとりの私」といいたいのです。

私は毎日疲労します。このままでは、生きてゆく活力もなくなります。

「もうひとりの私」はすぐ活動にかかります。疲れたからだを眠らせます。眠っている間に疲れをとるためにホルモンの分泌をし新しい血液を作つて、身体の各所に送り老廃した血液と変えて筋肉に活力を与えます。頭脳の掃除、老廃した血液を分解して尿を作り、腸も栄養分を摂取し、残滓を整理するなど数えきれぬ機能を駆使して、身体を整備して、毎朝私に返してくれるのです。

二回の高齢者教室に参加して

中央地区北浜一区天寿会
家 田 保 治

明治、大正、昭和と三代生きながらえて來た私七十三歳を半ば過ぎて、七十四歳間近かき老人会会員の一人です。

最近老人会の高齢者教室に二回足を運んでみると講師

の方は、『宗教の心』と題しての講話を承りました。それは老人の前途真暗闇なお話、若い頃しつかりした人程早くボケになる。

ボケない条件を守る事。第一条、今、をこの上無く大切にする事。第二条、顎をひいて胸を張る。第三条、にっこり笑って有難うを忘れるな。此の三ヶ条を守れば老人ボケも解消する。と聞きました。

次に不幸にして老後孫夫婦の世話になり同居している老婆がある寺に大金を持参して来て、おばあさん体如何と朝夕尋ねて呉れるのは有難い事だが実は私の体で無く私の財産目当てと思う様になりました。其の為お金を持つてお参りにいったおばあさんの心境は誠に淋しい限りだと思いつかがわきました。それから四日後公民館で今夜は、『老後の問題』と題しての講話をでした。昨年の敬老の日の調査では、百九十三万人の老人が居り昭和六年になると少年が二百十万人に減つて老人が二百三十五万の割で増える。又昭和九十五年には現在の調査予定では約十倍の老人の数になるから日本の眞の敵は老人化と税金と聞かされました。

老人が家族と同居したいもの四十二%あり、其の老人の将来自確と希望第一、健康と精神面。第二、経済の財

産。第三には人間関係を説明されました。憲法第二十五条に親は子供を養う義務が有る而し子供は親を養う義務は無いと示されているそうです。敬老の日は過去の事、現在では軽老の日として一般から扱われていますと聞かれました。私等の若い頃は、七転八起、と言う事を心の糧にし、失敗は成功の基、と勇気付けられて参りましたが老人になるとその勇気ある教えの諭しも年老いた者には適用しない言葉と思います。

私も病氣勝ちで思う様にならず療養に専念致し、お陰様で最近小康状態になり皆様の御誘いを受け会合にも御邪魔致しますのが今迄述べた様な次第です。私十四年前老人会に入会当時の会合が有ると老人福祉を元に種々力強い明るい講話も聞かせて頂きました。今後共其の点御考え下さいまして老人に明るい灯を御与え頂く様な楽しい講話の会に御導き頂き係の方々並に講師の方に切に切に御願い申し上げます。今日迄生き長らえて粗大ごみにされては誠に悲しい限りです。

昭和五十七年の新年宴会に参加しましたら誠にたのもし御声援、役員の方々に感謝して御聴しました。新年ます様御願い致します。

叙勲の栄に浴して

幸町福寿会

乾 達夫

図らずも教育功労の故もちて

叙勲に浴す文化の佳き日

(五十六年十一月三日)

五十年よくぞ使命に堪えぬきし

あとふりかへり思い出あらた

(以下思い出十八首)

みごもれる妻を残して爆死せる

同僚佐藤勇の悲憤の死顔

校庭の固きを児等と耕して

甘藷苗植えし空襲後のひととき

終戦後万引せし児を戒めて

ともに泣きたるバラックの教室

勤評の反対鬭争続きて

交渉果てず徹夜せし一夜

勤評の讃否両論の渦中にて

重責を負い自害せる学友染川教育長

守る責務きびしき海の一日終一日

焼けせる児と語り帰りし

共同制作のトーテンポールに春陽満ち

いとしの児等は巣立ちゆきたる

一人ひとり抱きしめたき感傷をもち

見送りし卒業の児等

いささかの孝養なりしをよろこびて

父母の靈前に勲章供う

教師たりしよろこびここに極まれり

教へ児より数々の祝辞届きて

教へ児の祝電読みて在りし日の

そのおのおのの童顔偲ぶ

五十余年前の教へ子

餅米と小豆携へ祝いてくれる

長たりし頃の同僚相集い

祝いくれたり涙極まる

支えられ授けあいつつ勤務せし

若楽の数々話題となりぬ

醉えばうたう荒城の月を踊りたる

長たりし吾の話に興ず

よろこびはここに極みぬ子と孫に

とり囲まれし叙勲祝宴
子の親としての責務を果したる

よろこびにいて祝酒に酔へり
「お爺さんになるぞ」と七歳の
孫は叫びぬ勲章みつめ

昭和五十六年十一月、茶会の席で右の句を作句しました。
俳句、詩吟、茶道ともつたない余生を思うとき、戦
争犠牲者や英靈に感謝し、益々国家の隆昌と四老連のご
発展を祈らずには居られません。 合掌

俳句に余生を!!

浜田第一福寿会

伊藤とよの

濃い茶の湯竹林照すからす瓜

今度四老連発足二十周年記念に何か一句をと連合会長
様からご指名を頂き身に余る光栄と存じます。

特に年老いてくると、この為にどんなことをすれば良
いのかと誰れでも考えることではないでしょうか。
それに、適度の運動とくよくよしない心の明るさが
必要だと思います。

その方法として老後の楽しみがあります。

昭和三十五年に鶴の森に隠居し、鶴の森老人会に入会し
ました。

ふとしたご縁で昭和四十年から三重俳句、四日市俳句
教室に加入。内藤まさを先生にご指導を賜りました。

老後の楽しみ

南浜田福寿会

白峰久駿

私達の町内の老人クラブもその為のいろいろな集まりがあります。

毎月一回の親睦会、会員手作りのおいしい昼食をともにしながらお互いに仲よく楽しく話します。

又、週二回のゲートボールも盛んです。と言つても試合に出場するのは程遠く、上手も下手もなくみんなで楽しみながら健康維持の為に役立てております。熱心さにおいては若い人もびっくりする位で、冬の寒さも夏の暑さも何のその、道行く若い人が、「この年寄りよおやるわ！」と明治青年のゲートボールの姿に立ち止まって見てくれます。

年一回の神社の清掃奉仕もささやかなボランティアです。その他年に数度の小旅行、ほとんど日帰りですが、お寺まいりや温泉やこれも楽しみです。

こうしていろいろと楽しませてもらつておりますが、これからも、みんなでよくよせず身体を適度に動かして一人でとじこもらずに助け合い、はげましあって老後をすごしたいものです。

生き甲斐ある生き方の

勉強を

常磐東部老人クラブ

伊藤茂

老人になること、これは人間である以上一人の例外もなく必ず訪れる運命である。一步一步死に近づくのだから誰も決して歓迎する気にはならないが、それだけに、「よき老後」「安らかな老後」は、生き甲斐ある生き方をしたいと願うものだ。

生き甲斐とは何か、人によって皆異なるだろう。だから他人からみて感心されるとか尊敬される様な生き方でなくとも、自分が満足し喜び又安心立命できればそれが最高の老後である。老後をこう考え、生きる為に又長生きする為に最も大切なのは身心が健全であることだが、これは他人にたよりすがることではない。自分の命、自分の幸福は苦労し知恵をしぼつて自分が生み育てて自分で守る覚悟、心構えを持たなくてはならない。

それには老人は消極的になり引込み思案になつてはならぬ。何をおいても頭と、身体を使うことだ。特に肝心なのは、頭の体操（読み書き）、そして困ったときにも

相談することは最後の最後。老人クラブは所謂老人の集りである。大会とか総会も大切な行事である。それ以上に欠かせないのは地域での会合協力ではあるまいか。集まれば気持も通い話もよくわかるはずだ。

老人と呼ばれいやがる人があるかも知れぬが老人だから老人と呼ばれても結構ではないか。だが老人は老人に相応しく、若い人にはない何かがあり、何かをして生き続けたいものである。老人はかつての若者が古びた存在ではない……。老人の経験と知恵をいかして、『生きているはり合い』、『生きているねうち』こうした幸福感、生きる使命感の勉強会、研鎖会とも云う学習会を今後は努める必要を感じます。

前田新町熟年の唄

日永ついたち会第八クラブ

生川 ヤスコ

未熟な詩をお読みくださいましてありがとうございます。

私達の町は未だ新しく昭和二十四年に誕生しましたもので、元の県営住宅が基盤となつて出来ました百戸余りの町でございます。

子供達は皆良く勉学に励み、若人達は良く働き、老人達もしつかり留守を守つてよい町です。

西に位置する泊山は前田町全体をしつかり抱くように

二、戦火に家を焼かれたり

愛しい人を戦場に

送った時もありました

よくも今日迄生きのびた

新町熟年集います

三、暑さ寒さに身を愛い

今日あることの幸せを

神や仏や家族にも

感謝の日々を送りましょう

新町熟年集います

(曲||お座敷小唄)

一、春は桜の花吹雪

秋は紅葉の紺毛氈

前田町を抱くよな

泊の山のその麓

新町熟年集います

冬の寒い風を遮ってくれておりますし、早春の二月ともなりますと忠靈塔の前庭に紅白の梅の若木ながら見事に花を付けてくれます。

又それより奥には春三月ともなりますと千本あまりの桜が見事にその花を競ってきます。その他木蓮、さつき、山つゝじ、等、種々の花を見る事が出来、秋ともなれば紅葉とそれはそれは眺めの素晴らしい所でござります。

是非皆様のお越しをお待ち致しております。

場 所

三重交通バス波木町か笠川ゴルフ場前行きの山崎町経由で山崎町で下車すぐ南が入り口でございます。

隨

想

高花平高砂会

松 岡 美代子

四日市老人クラブ連合会発足二十周年に当りましてよいよ活発な足踏みが生まれよとして居ります。

空気の良い澄みきつた美しさの中に鈴鹿山脈が西に横たわり東に伊勢湾を得て太平洋を控えたこの素晴らしい

丘陵にある高花平には、老人クラブ高砂会が生れ、その中に十幾年も続いております俳句の会があります。まして老人の衰えゆく脳細胞の若返り運動として俳句に挑戦して居ります。第三日曜日の午前中が何んと楽しい事でしょう、種々な事は忘れ去り三時間をこの機にかけてゆくのです。吟行に行つた句も勿論ですが、ほとんどは高花平の四季のうつり変りと身の廻りの事が多分に多いと思ひます。目が覚めて夜眠るまで氣の付いた事を工夫して一寸頭でひねりなるべく素直に五七五にまとめてそれを秀作であれ、まあまあの出来であつてもそれを持ち寄ります。また現代は孤独になりやすい老人の種々の話し合いの場であり健康の証でもあると思ひます。

昨年より盛んになって参りましたゲートボールが日一日と高まって楽しいです。

西南センターの東にあります老人の生きがい農園には、四季の草花野菜が次々と植えられあふれております。

どれもこれも皆老人の健康を意味するものであると思ひます。又それに違いなくたゞさわっている方々は皆健康で張りきって見えます。社会談話の場ともなり、交す言葉の一つも生まれてなにかとかたくなになりかけようとする老人の精神的危機をこう言つた活動で助かつて行

く時が自分を通して多々あるように思われます。

節分もすみ春の息吹を感じられます今日この頃、好天にはゲートボール、土造り、おのずから家庭内の余暇も充実したものに結びつけて皆様の明るい笑顔と共に私も老人会員の一員として真すぐに生きて行きたいと思って居ります。

自らの努力で築こう

笛川老人クラブ会長

堀木 清次郎

私が、或る老人クラブの会合に出席した時のことだ。入場して真先に目に付いたのが、舞台に掲げられた垂れ幕に「老人の幸せは、福祉に感謝して、自らの努力で築こう」と大書された標語だった。

私は一瞬「これだ！」と胸に応える思いがした。これが老人の進むべき真の道を、明瞭に示唆していると思つたからだ。

特に「自からの努力で築こう」の文句が、我が意を得たりの感が強かった。

人間は誰れしも、慣れるに従い、初心を忘れ勝ちになるものだ。老人福祉法が実施された当座は「有り難い世の中になった」と感謝した。それなのに年がたつに従い、当初の有り難さは何処えやら、当然のことの様に思う様になり、次ぎには欲が出て、物足りなさを感じ、それが遂には不満にまで飛躍する。

曾つては、老人の福祉など、社会も行政も無関心で、何の施策も受けられなかつた時代と、充分とは言えないにしても、福祉法が実施されている現在と比較すれば、結構な世になつたことを感謝せねばならぬと思う。

だから、もうこれで充分です。不満も言いません。と言ふのではない。より行き届いた福祉を願うのは、大いに結構だが、唯、無為に手を差し出しているだけでは、棚からボタ餅は落ちてはこない。古い言葉だが「ギブ・アンド・テーク」と言う諺がある通り、老人に相応しい方法で、何かを社会へ還元することによつて、社会の理解と協力が、得られるのではなかろうか。

自らの努力を惜んでいて、与えられないことだけを恨むのは、いささか虫がよすぎはしないだろうか？

戦前戦後の、苦難を乗り切つて生き抜いて来たのだから、もうこの辺で休息をと願う気持もわからぬではないが、我々は明治、大正の強者だ。他人の同情を乞うたり、

老人の特権を要求したり、そんな甘えた行為は慎しむべきだと思う。

そして、社会から愛される老人クラブになれば、ねだらざとも、与えられるべきものは与えてくれるだろう。

私は、意味深いこの標語を拝借して、我がクラブのモットーに決め、会員が集った時には、必ず全員が「老人の幸せは、福祉に感謝して、自らの努力で築こう!!」と一斉に大声を張り上げて、朗読することにしている。これを実行することによって、会員の心構えが、一段と向上すれば幸だと思つてゐる。

羽津地区の三大遺跡

羽津老人クラブ

矢守勝一

私共の住む羽津地区は西は海拔七二米の岡山丘陵（通称垂坂山）から霞ヶ浦の海に至る日本の縮図の様に変化のある小天地です。しかし歴史的にもそれぞれ古代、中世及び近世を代表する三つの大土木工事の跡を残しています。

その第一は四世紀後半と言わわれている志底神社境内の

前方後円墳、第二は室町中期の応永年間に築城と言われる羽津城跡、第三は元禄年間に作られたと言われる羽津（農業）用水であります。羽津用水は現在も羽津の殆んどの水田を灌漑している農業の大動脈です。

前方後円墳は残念ながら後円部だけしか残つていませんが、北勢地区最大又県下でも最古の古墳の一つではないかと思います。江戸時代末の嘉永五年（一八五二年）前方部を切断して道路を作つた際出土したといわれる副葬品の車輪石、内行花文鏡の破片、勾玉等が残つて居ります。此の副葬品より見ても前期古墳と判断出来ます。車輪石は水色の軟質の石製品ですが日本各地の前期古墳よりも出土しております、葬祭用の倣製品です。起源は大きい貝殻を磨擦して真中に穴を開け腕に輪として通した呪具と考えられています。

最近の考古学では副葬品より古墳の主の性格を判断して前期古墳はレヤーマン（呪師）或は祭主的な支配者、後期古墳は武器・具の副葬品の多いところより見て武人的な支配者と推定しています。最近やかましい魏志倭人伝に「一女子を立てて王と為し名付けて卑弥呼と曰ふ。鬼道に事へ能く衆を惑はす」とありますが此の羽津国的小王者の時代の百年と一寸前位の時代のことです。

羽津城は赤堀、浜田と共に赤堀氏三城の一つで中世の四日市形成の北方の重鎮でありました。戦前より何の郷土誌を見ても『関東下野国赤堀庄より來り長子赤堀盛宗を羽津城に置き云々』とありますが赤堀庄は上野国が正しく現在の群馬県佐波郡赤堀村です。恐らく北勢軍記あたりで間違ったのが尾を引いているのでしょうか。

私は土豪国人が盤踞する時代によくも一族郎党を引具して忽焉として北関東から当地に移動出現することが出来たものと長い間不思議に思つてましたが、足利幕府の

命令で南朝方の北畠氏との抗争に遠征して來た関東武士が南北朝統一の後に北畠氏看視のため配置定着したといふ説を聞き漸く納得しました。戦前にも此の事情が分っていた郷土史家がいたでしようが差障りがあり言えなかつたと思います。

羽津用水は八郷地区の中村から延々七糠程朝明川の水を引いて羽津の殆んどの田を潤しています。北の人荒木十兵衛が此の用水を造成する迄は斎宮山の裏のあたりの谷川をせき止めた七つの溜池があり天水を貯えて羽津の田を灌漑していたと言い伝えられています。

富田・山城線の有料道路の南にその溜池の一つが残っています。羽津用水完成の後荒木十兵衛の名声が揚るを

恐れた桑名藩は彼を呼び出して何所で仕末したものか再び吾が家へ帰つて来なかつたと伝えられています。

南と北の境員弁街道の傍に羽津の区画整理組合の手で羽津用水の大改修が終了した昭和二十八年四月に羽津地区の農家一同の名により荒木十兵衛の「頌徳碑」が建てられ後々の世迄その名を伝えることになりました。羽津地区へ歴史散歩を試みる方がおありでしたら喜んで現地を御案内申し上げます。

俳句教室に就いて

志氏ヶ野句会代表

藤井 富三郎

羽津地区市民「センター」に於て、昭和五十五年九月より十一月迄、当地区の村田青麦先生御指導の許、俳句講座を開講せられ、三ヶ月間俳句の基本を修得し、講議修了と共に十数名の同志の総意に依り、俳句を楽しむ会として「志氏ヶ野句会」を発足し、引続き同先生を煩はし、自主「サークル」活動を続け、毎月第三水曜日の午後を句会の日と定め、一ヶ月毎に各自の作句を発表し、先生の添削選評を受けて居ります。

またその一部を先生主宰の俳句雑誌「深雪」に投句したり、地区的文化祭に作品の展示をする等、発表の機会を興えて載いて居り、勉学の一端と致して居ります。

福祉の心を

富田地区高三区白寿会会長

平野竹一

四日市老人クラブ二十周年記念に当り一言。

四日市老人クラブ永年の間を反省します。社会福祉とは、先づ色々な問題を抱えている老人の友達等の悩みを除いていくこと。福祉の基本は他人を思いやる心で困った人を見かけた時は手を貸さずにはいられない人情であると思います。

昔から「人は武士」「柱は桧」「魚は鰯」と言います。が、老人は昔から堅気で武士的根性がある様に思われます。只今の時代は老人は昔の様に堅ぐるしい事を言はずに昭和時代の若き人々に理解の出来るように心掛けて行こうではありませんか。

二十周年記念の良き年に吾々老人は今一度反省しましょ。終に二十周年記念を祝福し、四日市老人クラブ連

合会の益々発展と尚一層三重県代表の連合会になることに皆んなで心掛けましょう。

反対語句の考案

神前仙寿会

山本雅太郎

老人会に入会してからゲートボールや旅行を樂しませてもらっている。田舎に住まうこととて自園があるので、健康保持のため適当に動いているが、余暇には本を開いて趣味に合つたことを拾つている。

長い人生経験の上で、いろいろな環境におかれて来たことにもよるが、人間は十人十色様々な個性の持ち主で、物の見方、考え方、捉え方が一様ではない。

昔から伝わる諺をとつてみても「千の倉より子は宝」というのに対し「子は三界の首かせ」と片や宝、片や邪魔ものという考え方がある。前者は貴重な一粒種を指し、後者は産制の無き昔。貧乏の子沢山をいったのであろうが、一つの事に対し二ようの表現をするのは大変面白い。いづれも当を得た言葉で老人になつて様々なことに直面したり、又世の中の変った事例に遭遇して、はじめて理

解ができるのではなかろうか。

「渡る世間に鬼はなし」という善人の見方をすれば、

「人を見たら盗人と思え」という用心極まる語句もある。すべて人を善人とみれば、世の中は案ずるに足らぬが、稍々もすると取りかえしのつかぬ失敗を招くことがあるので、その戒めの言葉であろう。

「飛び鳥跡を濁さず」「後は野となれ山となれ」全く

相反する語句であるが、今も尚、歴然として残されている。複雑多岐な人生航路の中には、各人の指針によって、斯く云わざるを得ない場合のあることを、長い体験が証明している。

「稼ぐに追いつく貧乏なし」と働くことを推奨すれば「運は寝て待て」と働く意慾を損じる言葉もある。何れが正しいのか対立の語句ではあるが。両者とも世の中はこれをゆるし、なまけ者に幸運の向く皮肉なことも稀にある。

「虎穴に入らずんば虎児を得ず」「君子危うきに近よらず」または「捨てる神あれば拾う神あり」など。若い世代の人には判断に迷う語句であろうが、それぞれの立場によって分別をつける知慧が、老人になつて初めて備わるのである。

「正直者の頭に神宿る」

「正直者が馬鹿を見る」

私たち老人は当面したことに対し、また長い人生の過去のこと如何に対処して来たか、反省してみるのも敢えて無駄ではないと思う。

ことを処するに語句のどちらを選んだか、そうして求めたものは幸か不幸か、善か不善か、または悲喜いいずれであったか。

余す人生はことわざを他山の石として、よく理解し、楽しいものにしたいのである。

高齢者の歳末（桑原幹根先生の文）

智積町たのしみ会

小林万五郎

昭和五十六年十二月三十一日の中日新聞に掲載されたいた記事で、元愛知県知事桑原先生の文に強く感動されましたので其の記事を原文のまゝ掲げましたから今一度お読み下さい。

信号の青を待つ間も年暮るる。これはある句会における私の拙い出句の一つであるが、高齢の私にはこの句の

示すように、気持ちだけの忙しい年の暮れである。いや年暮れだけではなく私は一年中来る日も来る日も、せかせかと気持ちだけが忙しい。

一日が終わって夜床につくときは「あきようも終わつたか」と、なんとなく安らぎ気持になる。せかせかと一日を過しただけに、事もなく、感謝の気持ちをも覚えて、安らかな眠りに入る。そして明るい朝、目覚めたときには「よし、きょうもまた生きてゆくぞ」と、一人われとわが胸に訴えて床を離れる。

一年が暮れてゆくとき、多くの人々は「ああ一年が終るかと思出を込めて、過ぎし月日を回顧するであろう。そして新しく迎える一年を、明るい朗らかな期待で迎えるであろう。

しかし現在八十七歳の高齢の私には、一年ごとに回顧したり、一年ごとに期待するのではなく、その日その日が計算の単位である。それだけに過ぎた一年は長く、迎える一年もまた長い。いや過ぎた一年の月日よりも、これから迎える一年の月日は、私にとっては、さらに一層長いものに思えるであろう。

このような気持で、その日その日を過ごしている私である。決して楽しいその日その日ではなく、なんとなく

生苦しい日々の連続である。しかしこのように言つても、自らの生命を、ことさらに断つべきでもないであろう。おのづからその日が来るまでは、生きながらえて行くのが、天意に従うことであると思われる。

中国の杜甫の詩に「人生七十古来稀」とあるが、今日においては稀どころか、日本人の平均寿命は、男女とも七十歳をはるかに過している。このように日本人の高齢化の結果は日本の人口増加を招来している。日本ばかりでなく、世界的に人口増加の傾向を辿っているが日本の人口増加は極めて顕著である。

そのために、現在の日本の人口一億一千三百余万人は十年ほど後には一億二千余万人程度となり、さらにその十年後には一億三千万人を超過すると予想されている。

このような事実から日本の政治の課題として、高齢者の福祉対策が取上げられているが、私のような高齢者は、まことに相済ない気持ちを覚える。以下（中斷）

原稿字数に制限せられておりますから残念乍ら途中ですがこれにて割愛させていただきます。

老人パワー

西坂部長寿会

小山左二良

先日の新聞で東京の有識者仲間が集まり、「高齢化社会研究協会」なるものを発足させた記事を目にした。読んでみると、全国の老人が結束して、農協や医師会並みの圧力団体に発展させる母体にしようというのである。

期せずして県でも、「高齢者問題懇談会」というものが出来たことが新聞に出でていた。プラカードを押し立てて「金よこせ」運動を繰り広げる圧力団体化する協会なり懇談会であることを、一概に詔歌する気持ちはないが、「歌つて踊つて旅行をして」だけの老人クラブから脱皮しなければならぬ時代が来たのではないかと思うのである。今、全国で七百二十四万余人が加入している老人クラブは、文字通り、民間最大のマンモス団体である。なおますます高齢化は超速度で迫りつつある現状にてらして、今や老人クラブ奮起の時が来たというべきである。

しかし、時の流れ、時代の変化はおびただしく、今の

老人が今この世代に合流して若者たちから同等に認められる力は残念ながら弱いと言わざるを得ない。思想面でも技術面でも頭腦面でも意志表現力でも、相当の隔たり——というよりも根本的なよりどころが異なっている。

それ故、まず研修に励むことである。若い世代に互角に位し、若い世代をまず理解することである。その上で、年の甲を生かせ、長い体験や、修得した尊い老人の特権を若い世代に浸透させていくことができたら占めたものである。

今「敬老」という言葉はまるで宙に浮いている。いくら鼓吹しても「眞に尊敬するに足る」老人が幾人あるかということである。若い世代の若者や子どもたちを先導し、頼りにされる老人になることができたなら、その時にこそ大きな顔をして「老人福祉」の恩恵も受けられるのである。

人間はおしなべて誰もが老いる。今の老人が「眞に敬われる老人」でありさえすれば、若い世代の若者までが一緒になって、福祉年金増額等の運動にも参加してくれる時代が来るのでなかろうか。

ひと口に、老人の特権を浸透させるとか、眞の敬老を享受するとか書いて來たが、それに至る具体的な道程を

書く余白がない。まことに難しい問題であり、理想論かも知れないが、ある程度若い世代の者たちが目を見張るような功績を、われわれ老人の手でやり遂げたいという霸気を持ちたいものである。

病床にて想う

三重平長寿会

伊藤秀二

四老連結成以来はや二十周年を迎える事が出来ましたのは、先輩皆々様の並々ならぬ努力の結果に外ならぬと存じます。今後共益々発展せらるる事を切望してやみません。

私等三重平長寿会は発足して未だ三ヶ年よりなりましたが三重地区他の長寿会について行けるのは、一海連合会長の御指導の賜物と存じます。

会員一同、社会奉仕は勿論種々の活動に一致協力、何とか立派な長寿会に盛り立てる所存です。

小生三ヶ月余入院してつくづく人間のもろさ、特に老人の弱さを感じましたが其の一端を申述べます。

四五十年前盲腸を手術して以来今迄に、胃腸障害なく

舶来と自惚れ、密柑の中袋は申すに及ばず、葡萄の種亦稀に西瓜の種等を呑み込んで祟ったのか、九月頃より、食欲減退、体重も七十キロが十月には五十五キロと急激にへり、夜中に時々腸が痛み何としても我慢なりませんので十一月十三日、市立四日市病院に診察に参りました処、朝血圧百七十が百二十に下り顔面蒼白、とりあえず痛み止めして頂きました処、H先生は「直ぐ入院せよ。其の上で種々検査する」との事に早速入院病床の身となり、十六日迄撤底的に検査。

結果は、「腸が詰まり早急に手術を要する。外科に行く様に」とのお話に参りました処、年令が年令だけに衰弱の為難色を示されましたが、十七日の夕方、外科医が三人来られて胸より栄養補給の『テントキ』一昼夜通しの手配せられ、翌日より外科は外科としての心電図を始め種々検査せられ、十日目の二十七日手術室に入りました。

先生は、家内に若し二・三時間で出て来る様なら見込みがない。四・五時間掛かる様なら大丈夫と申し渡された由。

幸いにも小生心臓が平常丈夫で肺活量も同年の人よりも九十位いが多いので、手術に堪える自信は持つて居

りません。それでも読みたい本や再読したい本等沢山ありますて、気が焦るのですが根気が無くて思う様になります。

永らく悪かった神経痛は不思議に良く成ったのですが、胃腸の方は気難かしくなつて毎日同じ様な物を、成可く控え目に食べて居なければ調子が悪く、変つた物を食べて機嫌を損うと腹が苦しいのです。こんな訳でがっかりしたり、心配したり、あきらめたりし乍ら毎日を送っています。こういう平凡な老化現象はもとより言うに足らない物ですが、然しこんな自分をまだ俺は心身共にしつかりして居るんだと思つて居ることは持前の頑固が抜けないと云うことでしょう。

- 誰々は大風呂敷だ。と言う時は事を大きく誇張して言う事。
- 風呂敷包み一つ。身辺の物を包んだ最少限度のもの。
- お祝儀も不祝儀もお見舞もお中元もお歳暮もお土産もみんな包む。「清濁併せ呑む」
- 形を変える
 - 一枚の風呂敷は時にテーブル掛けに。
 - 美しい模様のものは壁掛けになり。
 - 小さく折りたんでもポケットに。
- 二つ折りにして寒い時背中に入れ。
- 三角に折つて帽子になり、マフラーになり、時に応急の三角布になり。
- 四つ折りして袱紗になり。
- 四偶を二ヶ所づつ縛つて袋になり。

春のよもぎ摘み、つくし取り、わらび取り、秋のきのこ取りの欠かせない入れ物でした。

○四五冊の教科書と筆入れを入れてくるんだ包みの両端を腰に巻き学校帰りの道草。
○女子はその包みを結んで美しい紐で縛つて肩からかけて登校したこと。
一枚の風呂敷が色々な用途に用いられて来た事を思つて登校したこと。

湯呂敷と一口に申しますが、女性にとつて大変関りの多いものである事を改めて考えさせられます。
広辞苑の「風呂敷」の個所を見ますと「湯殿に敷いて湯から上った時足を拭う布」とあります。

風呂敷に学ぶ

県老人クラブ

須原志ずへ

春のよもぎ摘み、つくし取り、わらび取り、秋のきのこ取りの欠かせない入れ物でした。

一枚の風呂敷が色々な用途に用いられて来た事を思つて登校したこと。

時私共老人にとつて教えられる事が沢山あります。

一、包む。みんな好き嫌いなく受入れて一つに包む包容

力の大切さ。

二、形をかえる。四角のまゝ、三角形になつて。二つ折になつてと時と場合によつて自分の力を發揮してお役に立つて行く必要さ。

三、捨てる。六十年、七十年と入れ込むばかりでなく、時には思い切つて不要になつたものを捨てる大切さ。

老人のかたくなさ・頑固さは思い切り捨てないと世の落伍者になる。

四、生かされて。この様に身辺の一枚の風呂敷が幾通りにも活かされ重宝された存在であったとは。私共日常茶飯事の中に生かし、生かされて来た事に気付かしめられ感動をおぼえるこのごろであります。

今日この頃、年金受給制度の値上げ、医療費の無料化等、正に老人天国の私共、只々感謝するのみでございます。ふり返つて見ますに、三十六年以前のあの度々の戦争の為、苦しい、苦しい生活の中に大切な、大切な主人、或は子息を戦場に送り出し、悲しい、悲しい思いをしました。尚、ありとあらゆる苦難の数々が続きました。事を考えます時、ただ感慨無量目がしらが熱くなります。私も主人を三回の応集に召され送り出しました一人でございます。

老人天国に感謝を

あがた老人クラブ

小 松 すみ

新しい、五十七年度を迎えると共に、四老連結成二十周年を迎え、誠にお目出度い事でございます。現在の、

周

りましたが、案の条五時間以上要しましたので家内は一安心しましたとの事です。

手術後、十日位経て三十八度から三十九度余の高熱が一週間続きましたので、先生方も首を捻って居られ、結局、局部麻酔に依る再手術ましたが、お蔭で余病も出ませんで一月十五日に退院の運びとなりました。

本当に九死に一生とは此事かと家族一同喜んで居ります。之も偏に先生方の御努力と看護婦さんのお蔭と感謝して居る次第です。

云うても返らぬ事ながら、九月の食欲の無くなつた折、病院で検査して頂けばこんな事にならなかつたと後悔して居ります。

入院中患者を見るに四、五十歳の人は割合胃潰病が多く、七十歳以上は腸の人が多い様です。何としても六十五歳以上になるとすべての機能が小さくなるのは事実。

私同様自己の体に大丈夫と慢心して居らるるが現況、何としても健康管理は自分で平素より注意せねばと遅まきながら痛切に感じました。

老人クラブの一万六千余人の会員の皆さん、お互に生き甲斐ある人生を送る為にも毎日毎日の健康に注意して少しでも人の世の為に尽そうではありませんか。

近頃の私

下海老町

伊藤周平

何か書かないかと云つて貰つたのですが、殊更に書く様な事が何も有りません。只彼は此頃どうして居るだろうと思つて居て下さる人も有ろうかも知れませんので近況を書いて見ます。

毎日引籠つて同じ様な事を繰返している老人生活ですから、強いて書けば老人の戯言に終る丈けです。先日も年末に友人と写した写真を送つて来たのですが、こんなにも爺くさく成つたかなと驚きました次第です。自分の内側の事ばかり気になつて、外見には餘り気が付か無かつたのです。然し当然の事乍ら内外共に大変わりです。内側の方は先づ頭の働きが鈍つたのは驚くばかりです。

「今置きし物探しをり賜の画」と云う句を作つたのはついこの間の事ですが、こんな歎きは尋常の事で物覚えの悪くなつたのは云うまでもありませんが、何事にも咄嗟の判断が鈍つて失敗を重ねています。読書は何よりも楽しみであり必要でも有りますが、読んでも余り頭に残

老人が散歩して

八郷福寿会

水越仁

我が八郷地区は、四日市市の北東に散在する十地区からなる、広く緑につゝまれた、のどかな田園地帯である。地区の中央を流れる朝明川は、鈴鹿山脈を源にして東の伊勢湾にそいで居ます。

其の朝明川を中心として北側に地区市民センターが所在し、南側に八風道路と三岐鉄道が通つてゐる。

此の三岐鉄道は、北は北勢町から富田迄、各地区住民の重要な生活の足となつてゐる。又地区の北東より名阪高速道路が、名前の通り大阪に通じ、一日の交通量も約二千台から三千台とも聞いてゐる。

八郷地区には山村ダム伊坂ダムがあり、四日市及び其の周辺に水を供給している。又休日ともなれば、近郷の人達が家族連で訪れて終日緑の下で、オゾンを一杯吸つて、ボール遊びやサイクリングで汗を流してゐる。

私達地区老人は、地区中央に所在する市民センターに月一度か二度くらいあつまり、コミュニケーションの場

とし、又縦と横の連絡を密にして居ます。

又センター内では、踊の出来る人達は民踊のグループも造り楽しんでいる。其の他書道、茶、囲碁等々があり、それぞれ楽しみ乍ら親睦をはかつて居ます。

此の地区市民センターは、前書の通り地区の中央にあるので、私達老人は安易に来る事が出来、大いに助かっている。団地に住む様になつて緑が多いのにはおどろきました。其の緑に囲まれた自然環境の中で、来る日来る日を楽しく暮して居ます。

私は、月初めと十五日には、近くの八幡神社に参詣をして居ますが、神社は昼でも薄暗く深々とそゝり立つ大樹、其の大樹が今にも頭上に蔽かぶさつてくる思いがする。神社に参詣して氣の付いた事は、其の大樹の下に、古くは縄文時代からの古墳が、静かに時をすごしています。

市の文化財に指定され、保たれている様ですが、かなり荒れて居る様に思えます。昔の人達が、我々に残してくれた貴重な遺跡もう一度見直して、後世の人達に、引きついで行きたいものと思つて居ます。

私達老人は、歩く事が健康上の第一要素であると思い、天気の良い日は、妻と一緒に散歩に出ます。

歩いて地区内の老人の方々と接触して、一人でも多くの人と顔馴染になり、又意義ある老人活動に、進んで参加して戴く様に努力して行きたいものと思つて居ます。

老農夫田植機眺め畦に立つ

陽の当たる場所へ出よう

八郷寿会

松岡

繁

う。

こう云う事はうちの会だけではない筈である。他の地域ではどうしているだろうか、出て来ない者は仕方がないと置いてけぼりにするようでは会の役員たる者の怠慢であろう。出られない人それぞれに理由はあろう。要はその人に合う何かを見つけてあげる努力が必要であると思う。

いま社会福祉を大いに宣伝されて老人にも暖かい手が差しのべられ、我々老人にとつて真にありがたい御時世である。我が老人クラブ寿会に於ても、その趣旨に則り会員全般にひづみのないよう心掛けていろんな企画を立てゝすべての人に喜んで貰えるよう注意を払っているが、中には陽の当らない人もあるようである。こんな事ではいけない。何んとか考えなくては、と思いつつも現在に至つてゐる。

当寿会に於いても役員会にて情報の交換、発表、会員相互の幸福等について口角泡を飛ばして議論すること暫し、だが名案と云うものはそう簡単に出ない、むしろ迷

たのしい。然し何に誘つても乗つて来ない人、趣味のない人、出嫌いな人、或いは家庭の事情で出られない人、この人達を引張り出そうとするのは至難の業である。幹事会等で盛んに討論されるがベターな方法は見当らない。

論が多い。それでも只今毎月行っている会員の誕生会お祝いは名企画であったと思つてゐる。お蔭でどんな会合にも出席しなかつた人が顔を見せて呉れた。この事は我々当事者にとって真によろこばしいことであつた。

お祝いの言葉の後、座談会に時のたつのも忘れる。中には家庭の愚痴も出る。それをきいて上げるのもよし、注意して上げるもよし、和氣あいあいそして喜んで記念品を抱き乍らいそいそと帰つて行かれる。見送る我々もどんなにか嬉しい事か。

記念品の選定は三役々員協議の上決める。品物には必ずあかつき寿会の銘を入れる事になつてゐる。記念品は年度始めに一年分購入する。さてぼつぼつ次の企画を考えなくてはいけないと思つてゐる。

老 の た わ ご と

大矢知第二緑寿会

児 玉 千代枝

新聞やテレビで報じられているものに、とても耐えられない出来事の多いのに驚く昨今です。子は鎌いと昔

から言つてゐましたのに母親が腹を痛めた、いとけな

い子供を残して家を出、父親もまたその子を道づれに死を選んだり、留守居の子供が火事で焼死したり、生まれたばかりの子をロッカーに入れて殺したり、自分勝手な感情や事情で殺すとは畜生にも劣つたあさましい心です。

それともう一つ自分の命を粗末にする人が殖えつてゐることも悲しいことです。小学生、中学生の自殺者があると言うことは、今迄育てて下さった父母に申訳がないと思います。とに角死ぬ勇氣があるのなら何でも出来ると思います。小さいお子達には絶対にお母様が必要なんです。しつかりとした絆で豊かな心を培つてほしいと思ひます。朝刊を展げて何も痛ましい記事がないと、ホツとして何だか今日一日が楽しく過せそうに思います。どうか自分勝手な振舞はしないで下さいお願ひします。六十八年生きてきた、いいえ生きさせて戴いたのです。美しい年輪を重ねて天寿を全うするまで老も若きも手に手を取つて血の通つた暖い人生を送りたく願う今日この頃です。

○栗の皮むく勉強の机借り

○冬至湯に浸る大正遠くして

○水奔る満の植田を充たすため

合掌

老人会への反省

大矢知第六緑寿会長

加藤勝

四老連も早や二十周年を迎える記念誌発行まで漕ぎ着けたことに對し、先輩各位の努力に深く敬意を表したい。私は七十四歳の今日まで、自分が老人と思つたことはないし、また思いたくなかったので、老人会には関心がなかつた。

ところが知人が地区老人会を設けたいから是非入会してくれと熱心に誘われたので、不本意ながら仲間入りしたところ図らずも会長の席をけがすこととなり、新人として目下勉強中である。

入会してみて老人会がなんと恵まれた老人天国だと思わずには居られない。健康のためといってゲートボールに興じ、毎月のように旅行業社の企画にのつかって、どこかへ手頃な費用で観光に連れ出され、気のあつた同志にはまたない樂園である。こんな恵まれた老人になれるこことを、明治生まれの誰が予想し得たであろうか。これも昔はなかつた、老齢年金、その他補助金のおかげだ

と人はいう。苦しい生活のどん底から幾多の戦争を体験し、未曾有の敗戦からインフレとあらゆる困難を克服し、今日の経済大国を築いた吾々としてこれぐらいのことは当然といえばそのとおりかもしない。が、私の反省したいのは老人会の行事に参加し、これらの恩恵に要するのは一部の人達ではないかということである。家で留守番をする淋しい老人、病弱な人、独居老人、仕事を探している老人など種々の事情から会費を払いながら会に顔も出せない多くの会員がとり残されていることである。同じ年代であつても就職している老人は殆んど老人会に入つていないので現状ではないだろうか。できるだけ多くの会員に均等するよう、もっと積極的、具体的活動する老人会こそが、望まれる老人会ではないだろうか。他力本願的な老人会であつてはならない。

今や日本は世界の経済大国でありながら幾多の内憂外患に直面し苦悶しているのではないか。その一つに老齢化社会問題がある。近い将来若年と老年の人口比率が逆転しアンバランスの社会になることは必然である。将来とも今日のような老人福祉や年金が果して期待できるであろうか。若者の老人への不満爆発はないと断言できるだろうか。老人大国になれば老人としての社会的役割が

当然要求され、娯楽や趣味にばかりしたってはおられず、
齢相応の社会的任務を負わされることは必至である。遊
ぶ老人会から働く老人会に脱皮することも間違いない。

今日財政改革が叫ばれ昭和維新が断行されんとする
とき、老人会も従来のレジャー中心から、若い世代と共に
地域社会で明るい町づくりに励む機関としてふさわしい
学習活動の振興、福祉活動の増進、後輩の啓発、生産活
動の開発を中心に積極的に行動し、魅力ある集団として
老齢者全員の参加する老人会となることを念願するもの
である。

私の過去を振りかえり

『老人福祉に感謝』

水沢白寿会連合会長

鎌田俊一

嗚呼余は齢、古希に近し、大正初期に生まれた我輩の
若き時を振りかえれば、恰も憂症糞の中に座せりと云う、

昔の言葉もありますが、正に其の通りであつたと思いま
す。昭和初期の不況時代、今から考えれば本当に想像も
つかぬ程金つまりでした。

ながら、軍隊生活の内務のきびしさ、其の苦しみは一生
忘れる事は出来ません。そして終戦になり、喜びの復員
も束の間、内地の食糧不足、又あらゆる物資の欠乏、配
給生活に堪え忍びながら、両親や妻と共に幼児三人の幼
育教育に息つく暇なく、年老いた両親との他界の別れあ
り、ひとしお淋しき思いもありました。

又外にありては、農地改革、町村合併等、村改の激動
化は激しく、目まぐるしい思いもありました。こんな思
いをした事のある人も少なくはないと思います。お互に
過去を振りかえりながら、今の世のありがたさに自然と
大工、左官等の職人の日当が一日一円以下で金のない

為、普請する人少なく職人でも失業状態の人もあり勝ち
でした。また一俵：六〇キロ当り六円前後、蚕の爾も一
貫：三・七五キロ当り二円四十銭前後の時もありました。

水沢特産のお茶も一番茶は辛うじて売れましたが、二番
茶はほとんど買い手なし、製造しても収支つぐらわず、

本当に困った年もありました。そして支那事変勃発致し、
大東亜戦争となり戦争が長びく程物資の欠乏ははげしく
あらゆる物資が統制時代となり、國家総動員法も発令に
なり、多くの若者は次から次と応召になり、私も応召を
受け内地の軍隊教育も程々に、野戦生活に入り多くの親
しき戦友との戦死の別れあり、其のかなしみに堪えかね

ながら、軍隊生活の内務のきびしさ、其の苦しみは一生
忘れる事は出来ません。そして終戦になり、喜びの復員

過去を振りかえりながら、今の世のありがたさに自然と
大工、左官等の職人の日当が一日一円以下で金のない

頭の下がる思いが致します。今の政府のあらゆる福祉政策のゆきとどいた事、まして老人対策のありがたさは、おそらくどの国にも劣らないと思います。

今や我が国の老人人口の伸び率は、世界一かと想像して居ります。昨年我が国の老人人口は日本総人口の一割に近しと報ぜられましたが、尚二十年後には約二割の老人が出来得ると予想されます。どうか老人の皆様方、其の有難しさをかみしめながら老人としての至命を果たさなければなりません。

先ず健康の保持、達者で長生きをして、生きがいのある生活をスローガンに、先づ適度の運動、軽スポーツ、

つまりゲートボールの普及や民踊、歌や踊り等両者共頭をつかい、老人ボケを防ぎ、いつまでも変わぬ行動が何よりの至命だと思います。其の他なんでもすきな事には手を休めず、日常生活に専念され、まして長寿者の増加に伴ない自分を老人と思わないように、七十、八十はまだまだ若い、八十、九十にむかいがきたら、一〇〇まで待てと追いかえせ、以上四老連二十周年を記念して、色々申し述べました。

長寿者番付表を試みて

保々老人クラブ大樹会会長

館 作 助

人間だれでも元気に長生きしたいもの。ましてや、寿命の高度成長、が加速し、我が国の平均寿命が女七十八歳を突破、男も七十四に、百歳以上の高齢者が千人に達した今日、さらにもっと長生をと長寿を願うのは、人情の自然だろう。

私は大樹会の会長に就任したのが昭和五十二年四月、最初に感じたのが会員四百余名のうち、八十歳以上の長寿者が何人いるだろうか、そこで長寿者番付表の作成にとりかかり五十二年四月の老人クラブ総会の席上、印刷物にして希望者に差し上げて居ります。この番付表は毎年継続しております、ご長寿お目出度う、もつともつと長生きして下さいと書いて該当者へ配ると、自分は保々地区で何番目か、男では、女では、あの人は二歳年上だったとか、可愛い孫が来たらこの番付表を見せてやりたいと云つて仏壇の引き出しに入れる老人もあるとか聞きます。年々ふえる長寿者のいたわりは、家族だけでなく地域

ぐるみで取り組むことが大切であり近所の人々、特に老人クラブ会員の小さな思いやりが長寿者をどれほど力づけることか知れないと私は思います。

では参考までに保々地区の長寿者（八十歳以上）の年次別を数字で列記します。

年度	会員数	長寿者 八十歳以上	比率 %
52 年度	四五五名	五一一名	一一・二
53 "	四七〇"	八四 "	一七・八
54 "	四六五"	八五 "	一八・二
55 "	五一五"	八九 "	一七・三
56 " 五五四"	五二八" 一〇四"	一〇一" 一九・一	一八・八
57 "	一〇四"		



川柳



熟年のブームに老いも負けられず

下野 森 谷 安 子

野心のない暮らしに老の日日平和

全

千代紙へ千の願いの鶴を折る

共同 川 口 白 楊

幸せは裸でビール飲むうまさ

全

胸痛む亡き子の歳を数へては

河原田 中 村 タ ヴ

寄り添つて旅を重ねる老夫婦

全

川風に涼しき裏の小庭辺にシンビジュームの鉢ならべをり

五嶋 寿美子

短歌



七十の峠も越えて健かに五十鈴の
森の玉砂利を踏む

八郷福寿会 伊 藤 利 彦

離れ凧柿の梢にかゝれるを孫は取
れよとわれにせがみぬ

八郷福寿会 太 田 艷 生

鈴鹿嶺の残雪見ゆるわが庭に
あせびの花の今咲き初むる

八郷福寿会 二 村 与 市

命綱他人にゆづりし外人の人間性
のかく麗はしき

伊 藤 寿恵子

川風に涼しき裏の小庭辺にシンビジュームの鉢ならべをり

川島 雨竜選

老いたれどゲートボールの友ありて

日々を楽しくステイツクを振る

下野 大城戸 又男

青空を映つさんものをと夜をこめて

わだちのあとに雨降りつづく

野呂 推陰

診察の順待つ間吾を待つ

兄は病院の草むしりをり

大矢知 安藤 まさゑ

水張田となりて今宵は灯のかげを

うつす隣家ちかぢかと見ゆ

楠井 文

古里のせゝらぎ清き散歩道

見知らぬ娘会釈して過ぐ

星 五四平

宝石の如くに光る南天の

葉先きのしづく雨のあがりて

西脇 光枝

石仏の息をひそめておはします

一山が今木草のいぶきす

大矢知

国分 恒子

父逝きて尋ねる人も無き庭に

白牡丹の芽たくましく吹く

春日部 家子

クロツカス土のぬくもりおし上げて

今日は小さき花を開けり

後藤 きさゑ

蓮翹は陽ざしうけをり伸びし枝

黄の輝きが垂れつゝゆるゝ

白仁 友枝

元旦を砂むし風呂にうづもれて

居ればゆかたを汗のつたひぬ

林 文子

二つ葉の青首大根間引かんと

老眼鏡かけ畠に出でぬ

人見 賢子

厨ぬち吹きぬく風の心地よし

翡翠の色なす銀杏ゆである

河原田

服部 ちず子

震災も戦争も遠き昔となれど

心に刻みて吾は老いやく

黒田 タケ

楽しみは丹精こめし花を見る

老いしこの身の年を忘れて

母の齢迎えて想ふ亡き母の

脳卒中に倒れし時を

若葉会
山本 美哉

中村 さい

薔なるうぐいすかぐら封じこし

便りよ今年ふたたびの雪

三重
垣内温子

思ひ出の駅に降り立ち亡き夫と
共に歩みし道ふみしめぬ
遠き日をなつかしみつつ読み返す
古き文束捨てきれもせず

塩浜矢田かず

待つ人もなき家なるに気ぜはしく

帰り急ぐを娘に笑はるる

全 全

心張りて老化現象防がんと

趣味に娯楽に明け暮れており

四郷
井上もと

ささやかな福祉年金いただきて

入学の孫にプレゼントを買ふ

四郷
井上うら

老の身の健康のため民踊と

ゲートボールに心配りぬ

森 下一重

顔なじみゲートボールに集いくる

笑顔絶やさず日焼けし顔で

土井恒吉

